

し皇恩に報いむ。」といひ、「漢土聖賢仁義の道を以て經とし、西洋藝術諸科の學を以て緯とし、只顧皇國の威稜を盛に致し度」と云ひ、「天下の武備は徳川一家の武備にあらず天下のものなり」と云つ居るのを見ても明白である。

先生は實に天才であつた。天才に後なしと云ふが如何にも其通りである。先生は子孫を残さうとして随分苦心をしたが正妻には嫡子が無い。妾腹に生れた恪次郎は不肖の子であつた。恪次郎死後、血統は全く絶えて仕舞つた。血統は絶えたが其精神は決して滅びない。幾多の繼承者が残つて居る。

先生歿せられて後四年、世は王政維新となり、事々物々先生の意見が實現されて來た。定めし先生も地下に莞爾として居らるゝであらう。先生の云はれた通り、世の進むに従つて先生の眞意も段々了解されて來るやうになり、先生の偉大なる事が認識されて來るやうに成つた。明治廿二年憲法發布の大典に際し、朝廷では先生の生前の功勞を思召されて、正四位を賜はつた。同時に贈位を受けたのは、藤田東湖と吉田松陰とであつた。

要するに先生は其識見が半世紀以上も進み過ぎて居つたのだ。先生の如き先覺者を有して

居るのは郷黨の誇りである。否我日本の誇りである。

茲に先生の傳の終るに當つて、予輩は近代學界の耆宿で而も先生の門下であつた故加藤弘之男爵の御言葉を拜借して、此稿を了らうと思ふ。

「僕は東で象山西で南洲を當時人傑の兩關と思ひます。此兩關は性質に於ても事業に於ても事歴に於ても何も彼も互に異なつて居りますけれども、其兩關たる點に於ては全く優劣はないと考へます。」(大正二年松代に於ける象山先生五十年祭に代讀された講演による)

x

x

x

x

嗚呼象山先生非業に仆れてから早くもこゝに五十有餘年、今や天下の政界と云はず、學界と云はず、宗教界と云はず、教育界と云はず、將亦實業界と云はず、眞摯の氣象が缺け、堅實の氣風が廢れ、自己の職分を忘れて自利のみ汲々として居る時に當つて、一代の師表として、國士の典型として先生の如き人物の輩出を要求するや、極めて切である。此時に當り本會は同志と謀り曩には先生終焉の地點を求めて之を永遠に表彰し、且つ又先生の傳記を撰

びて廣く之を天下に頒布する所以のものは、蓋し一人にても此傳記を読んで、先生の憂國の至情と、至誠國に盡すの心術と、世界を達觀した識見と、科學的研究的な態度と、所信を斷行するの勇氣とを慕ひて、感奮興起するもの出でんことを切望するの微意に外ならないのである。

附 錄 (一)

以下掲ぐるのは象山先生遺蹟表彰會の事業の一として、大正天皇の御大典舉行後即ち大正四年十二月四日を以て京都帝國大學學生集會所に催した講演の筆記である。

科學者としての象山先生

工學博士 青 柳 榮 司

象山先生が一世の大經世家であつたことは誰も知る所であるが、之と同時に卓越せる科學者であつたことは知る人が尠い。本日茲に私が科學者としての象山先生を紹介することを得るのは何よりの光榮と思ふ。

先生は幼にして朱子學に長ぜる松代藩士の竹内錫命と申す儒者の門人となり朱子の唱へた理氣性命の學をも習得した。元來朱子の學は王陽明の學の如く單に精神のみを重ずると異り

精神を重すると同時に物質をも重じたのである。即ち物に就て理を窮むる學で精神的であると同時に科學的であつた。察するに生來非凡なりし先生が此漢學を學んだ爲め立派なる科學的研究家たるの素地を築いたものらしい。後西洋の學術を研究するに及んで、宋儒理氣性命の學を以て西洋の科學を融合せしめようと勉めたものである。

門下生小林虎三郎の歸省に際し與へたる左の文章を見ても、如何に科學的識見の高かりしかを窺ふことが出来る。

「宇宙の實理は二つなし、斯の理の在る所は天地も此に異ること能はず。鬼神も此に異ること能はず。百世の聖人も此に異ること能はず。近來西洋の發明する所の許多の學術は要するに皆實理にして祇以て吾が聖學を資くるに足る。而るに世の儒者類ね皆凡庸にして窮理を知らず視て別物となす。管に好まざるのみならず動もすれば之を冠讐に比す。宜なり彼の知る所之を知ることなく、彼の能くする所之を能くするなく、蒙蔽深く固く永く孩童の見を守るや。此輩唯だ哀慙すべく以て商較となすに足らず。大丈夫當に大塊有る所の學を集め以て大塊無き所の言を立てよ、小林炳文は予に従て遊び、而して吾が言を説ぶ者也

其歸省するに於て書して之を贈る。」

今より七十三年前天保十三年九月（西歷千八百四十二年）三十二歳の時、砲術師範江川太郎左衛門の門に入りしも、意に充たざりし爲翌年二月此門を辭す。其後兵學を記せる洋書を見て蘭語の必要を感じ、之を讀まんが爲自習を始めた。弘化元年六月更に黒川良庵に學び之により初めて西洋の進歩を知り大に驚いた餘り外情に通ずるには先づ其言語に精通せねばならぬと深く感じたのである。本來漢學を修めた儒者としての先生が、斷然節を折り刻苦精勵蘭語を修め以て百般を研むる基を立てたのは、非常の覺悟であつて敬服の外ないのである。先生に科學の知識を與へたのはショメールの百科全書とソンメルの宇宙記とである。此百科全書は十六冊で其價四十兩、就中宇宙記は其價五十五兩であつたが、當時我國に頗る稀な書物で幕府の天文方薩摩の藩侯及び先生が各一部づゝ所有したのみで、大に誇とせるものであつた。門下生吉田松陰の事に座し安政元年（六十一年前）から九年間幽閉された。其間最も楽しんで通讀したのは此百科全書及び宇宙記である。其際特に好んで研究したのは物理及化學である。此等の蘭書は凡て夫人の兄勝海舟及義弟村上誠之丞の周旋に依て得たもので、其資

金を與へ大に先生を助けたのは英明なる松代藩主眞田幸貫公である。

弘化三年（六十九年前）沓野、佐野、湯田中なる三村の利用係を命ぜられて種々の書物を讀み、殊に洋學を學んでから之を基として土地を開墾し、馬鈴薯を植ゑ農藝の道を講じた。弘化三年十一月利用掛として營利的敷設に就き意見書を出して居る。即ち沓野の山には鐵鑛のあること、明礬製造のこと、材木を焼いて灰汁鹽ポツターを製造すること、湯治人の排泄物から硝石を取ること、石墨からポットロード（鉛筆）を製し當所の物産の一にすること、白根山の硫黄を取り之を原料として火薬を製すること、湯田中より結麗土クレイ（クレイ）や石膏を採り、又を原料として陶器を製すること等を述べて居る。多分視察の上意見を上つたものであらう馬捨場の土より硝石を取ることを實行したことは確である。

弘化元年五月（七十一年前）先生は既にシヨメールの百科全書に基き、舶來のギヤマンに劣らない上等の硝子を作り、グリーンガラスと稱し人に與へて居る。嘉永元年（六十七年前）寒暖計にて湯澤温泉の溫度を測つて居る。自ら華氏を用ひたが攝氏も知つて居つた。又望遠鏡懐中時計鉛筆消護謨等も持つて居つた。先生は亦化學分析（蘭語にてシケイキユンデと呼

ぶ)を學ぶ爲ギラルチンの著書を読んだ。嘉永元年（六十七年前）沓野地方巡視の際に銀鑛や黃銅鑛を發見して居る。而して黃銅鑛に最も似て居る黃鐵鑛から鐵を分け取ることの出来ないことや、西洋の分析に濕法と乾法あることを説き、沓野の山から發見した銀鑛が生野銀山の銀鑛に似て居るが、銀分は少し劣り其中に亞鉛を含むことを確めて居る。且つ沓野村にて銀鑛の吹き分けを實驗して居る。

上述せる三村の温泉の分析を行ひ硫酸泉であることを確め、其内滋の大湯は硫酸鐵を含むから皮膚を強壯にする効があり、一本瀧の湯は硫酸ポツターポツターがあるから礙を解く力があり角間の温泉は硫酸曹達を含むから清冷で腹部の多血に歸因する病氣に効能があると言つて居る。嘉永二年（六十六年前）電氣試験用として自ら作りたる絹卷銅線の一片は遞信省博物館に保存されて居る。安政五年七月（五十七年前）磁石を作り人造磁珠と呼んだ。蘭語でコンストマグネートと稱する。先生は地震豫知機として利用する爲め、口繪に示すが如く馬蹄形の磁石に三角形の鐵片を吸ひ附け、之に百三十匁位の錘を下げ、室内に垂れた。さうすると地震の起るに先ち機械的振動に依り錘と共に鐵片が墜落するから之を豫知する事が出来る。

其難を免る爲には之が地に落つるを合圖に外へ出づれば宜しい。若し又夜陰此音にて目を醒まさん爲めには鍾に鈴を結び附けて置けばよいと言うて居る。之は他の人々に實費（上等品二分、並等一分二朱）を以て分つて居る。此報知器は信州長野市近山氏の所有する所である。安政五年八月（五十七年前）電池を作り、萬延元年（五十五年前）之を用ひてガルバニツセスコックマシーネと稱する電氣治療器械を作つて居る。口繪に示す通り右にダニエル電池があり、中央に劍を振れる人形の立てる箱があり、左に握棒を備へて居る。此劍の刃には雄螺旋の様な窪みがあるから、箱の前方に垂下せる金屬棒にて其刃を摩擦すると、電池から流るゝ直流電氣の斷續が行はるゝのである。今日は残つて居らぬが多分箱内には誘導線輪があつて、之に依り交流電氣を發生させ握手に傳へたものらしい。人形を用ひたのは精神的効果を與ふる爲めでもあらう。此機械は現に逓信省博物館に陳列してあるが、先生は之により醫療の功を奏したと言うて居る。此治療器械に用ひた電池に就ては村上誠之丞に與へた手紙を見てダニエル電池なることが知れる。

先生は又寫眞術をも研究した。安政元年（六十一年前）横濱警衛の爲同地へ行つた時、十

六年前に完成せる當時流行のダゲロ (Daguerro) 式寫眞を以て米人が先生の乗馬を撮つた。ダゲロ式寫眞とは沃度銀 (AgI) に光線を働かし之に水銀の蒸氣を觸れしめたもので、西曆千八百三十八年に完成——十五年間全盛であつたものである。先生は家來に命じ寫眞の種板を作るには沃素を用ふ可きか或は臭素を以てすべきかを其米人に尋ねしめた所米人は大に驚いて何うしてそんなことを知つて居るかと反問したと云ふことである。此時先生に於ても米人が寫眞のピントを合するに螺旋を用ひて居るのを見て大に感服したさうである、先生も自身にカメラを有し自分の寫眞をガラス板に撮つて居る。然し藥が不足で十分寫すことが出来なかつたらしい。先生は此寫眞器械を留影鏡と云うて居る。此カメラは三人共同で四十五兩位を出し、多分名古屋から買入れたさうである。先生の肖像の今日傳つて居るのは此器械の御蔭で、後に此寫眞を繪に書き更に之を復寫したものと云はれて居る。其外先生は有名な砲術家で西洋式研究の深かつたことは人の知る所である。又幼少より和算に精通し西洋數學をも修めた。又西洋の文明に達觀せる結果として外國留學生を出すべきこと、西洋より諸學の師を招き殊に詳證術即西洋數學の行はるゝ様にしたきこと、西洋に於ける厚生利用の諸工作

を開きたきこと等の意見を有して居つた。

以上述べただけを見ても象山先生が西洋科學と其應用とに於て、如何に興味を持つて研究したかゞ分ると同時に、科學者として先覺者であつたことを追想し、只管崇敬の念に堪へない。先生が宣傳した對外防備の意見と國光宣揚の主張とは實に此科學的修養の一發露であつて單に政略術數を弄する經世家とは其選を異にして居つた。當時大抵の儒者に至るまで攘夷鎖國の論に傾ける秋に際し、毅然として進取的開國論を唱へ國家將來の爲め大に畫策する處があつたのは、實に先生の偉大なる所である。悲しい哉當時邦人の非科學的識見と皮相的觀察とが、此の國士をして非命の最後を遂げしめた。先生を殺した刺客の精神が斬姦狀に示す通りとすれば彼も亦一生懸命に國家を憂へたものでもあらうが、其頭腦が非科學的なりし爲斯かる間違を惹き起し國家に對し多大の損失を與へたのである。此例を見ても如何に熱誠なりとて頭が伴はないと却て國家に對し不忠實となることのあるのが分る。這是昔ばかりでない維新半世紀に垂々とする今日に於てすら尙萬般のことに就て之と同様の出來事が起るのを見るは、我國に於ける科學思想の貧弱なる爲で邦人の一大缺陷と申さねばならぬ。之が爲め

幼稚なる研究程度を以て十分なるものと輕信し、非科學的に己れの事務事業を遂行して心附かざるものあるは、誠に寒心に堪へないことである。目今の急務は國家の爲精神的であると同時に、大に科學的實行を以てせねばならぬと鼓吹するにある。冀くは何れの方面に於ても毅然として俗論の上に立ち、科學的に社會を指導すること先生の如き先覺的人物が一人も多からんことを切望して止まざる所である。

象山先生の砲術に就て

工學博士 武 田 三 郎

佐久間修理即ち佐久間象山先生が幕府より蟄居を赦免せられたる歳は文久二年(西曆千八百六十二年)にして、私は是歳に生れたるを以て先生が遭難逝去の歳には私は僅かに三歳なりき。私が松代に佐久間象山と云ふ有名な大學者がありしことを聞きしは明治八年にして十四の時なり。私の曾祖父の弟高橋勇助は信州松本鍛冶町に住し商業を營めり。文久三年に

齡九十六歳に達せしを以て、民間の慣例によりて百歳の祝を爲し、一百翁壽橋と號し親戚知人の請に應じ壽の字を書して預與せり。其の翌年即ち元治元年の三月象山先生は上洛の途次松本に宿泊し、高橋家を訪ひ壽橋に面會して壽の字を書かせ、自身も即座に額面を揮毫して壽橋に與へたり。私は十四歳の時高橋家に於て其の額面を見て、落款の子明とは松代藩士佐久間象山先生の字にして、先生は有名なる大學者なることを、壽橋の養子長藏翁より始めて聞きたり。其の後明治二十五年頃陸軍砲兵會議（現今の陸軍技術審査部の前身なり）に在職中議長牧野陸軍少將より、先生は漢學に精通し兼て蘭學に通曉せる大砲術家にして、吉田松陰先生や勝海舟翁等の師なることを聞けり。其の當時牧野少將より象山の事蹟を詳しく聞き置かさりしは甚だ遺憾なり。一言附加せんに、牧野少將は松代藩士にして私より十七八歳も年長者なり。此人は嘗て象山先生の黨陶を受けしことありといふ。明治二十三年頃大阪兵砲工廠提理陸軍砲兵大佐より榮進して少將となり要塞砲兵監兼砲兵會議長に補せられたり。旅順の攻城戦や沙河の砲撃に於て有名となりたる二十八センチメートル榴彈砲又は日清戦争及日清戦争にも使用せられたる壓搾青銅製野戰砲並に壓搾青銅製攻城砲は少將が工廠提理時代

の産物なり。

實に象山先生と私とは同じく信州生れなれども、前述の如く私は先生の砲術に關して見聞極めて微少なりしを以て、主として象山全集及象山先生實錄に就て取調べたる事項を基礎とし、先生の存命中に於ける外國の砲術に關する事項は、外國の書籍に就て取調べたるものを材料として茲に先生の砲術に關する講演をなさん。

象山全集及象山先生實錄に據れば、文政、天保、弘化、嘉永年間には松代藩主は信濃守眞田幸貫なり。幸貫は白川藩主越中守松平定信の二男にして、將軍徳川吉宗の曾孫なり。賢明にして文武兩道に通達し厚く士民を愛撫し深く意を教育に注ぎたり。天保十二年（西曆千八百四十一年）六月權中納言徳川齊昭の推舉に依りて幕府の加判（老中）に列せられ、父定信の遺志を繼いで海防の事に意を用ひたり。天保十三年（西曆千八百四十二年）九月七日象山は藩主眞田幸貫の命を奉じ伊豆の韮山に赴き、幕府の代官にして且砲術師範を爲せる江川太郎左衛門に就きて西洋流の砲術を學びたり。時に年齢三十二歳なり。翌年二月江川より免許を得て江戸に歸り、更に幕臣下曾根金三郎に就て砲術の傳書數冊を謄寫研究し以て技術を上

達せり。同年十一月象山は藩主眞田幸貫へ上書して本邦の海岸防禦に關し八個條の建議を爲せり。茲に軍事に直接關係の條項を掲ぐれば次の如し。

- 一、諸國海岸要害の所に嚴重に砲臺を築き平常大砲を備置き緩急の用に應ずべき事
- 二、和蘭交易の銅を暫く差止め右の銅にて西洋製に倣ひ、數百千門の大砲を鑄立て諸方へ分配すべき事

三、洋式の軍艦を作り水軍の駆引に習熟せしむべき事

象山先生は西洋流砲術の蘊奥を研鑽するには、先づ西洋の書籍を讀解し得る技倆を養ふを必要と認め、之れを當時の蘭學者坪井信道に諮れり。信道は其の高弟黒川良庵をして蘭學を象山に教へしめ、其の代償として象山をして漢學を良庵に教へしめて、所謂學問交換を爲さしめたり。時に弘化元年（西曆千八百四十四年）六月にして、象山の年齢は三十四歳なり。藩主眞田幸貫は象山が良庵より蘭學を習ふを聞くや、良庵を藩邸に招きて謁を賜ひ、親しく左の意味の依頼を爲せり。

「良庵ちと頼みがある。此頃其方は修理と蘭漢學の交換をして研究し居るさうだが、修理

は此方の秘藏物で、あれには可成早く蘭學をやらせなければならぬが、其方には別に儒官を遣はすから、漢學は其者に習ひ、さうして、修理が今日迄其方に漢學を授けた手間にも猶蘭書を讀ませて、少しも早く蘭書の讀める様にさせたい、云々」

當時西洋諸國に於ては、熱心に實學を研鑽せる科學者竝に科學を實際に應用せる工業家の多年撓みなき努力によりて、科學竝に其應用は着々進歩せり。加之「ナポレオン」時代約二十年に亘れる戦争の實驗を積みたるを以て、其等の結果として軍制戰術砲術は相連繫して逐次改良せられたり。之に反し本邦に於ては外面は武門專權威嚴堂々たる觀あれども、内實は昇平の長く積きたる結果として、武門も亦往々奢侈に流れ、軍備の弛緩極に達したる際象山先生が、西洋諸國に於ける軍事の進歩に着眼し、晩學ながらも奮勵して蘭學を修め、以て進歩せる西洋流砲術の直輸入を企圖したるは實に卓見なり。藩主が象山を視ると慈父の愛子を視るが如く、懇切なる庇護を加へて其大成を期せられたるは、賢明の主と稱するも可なり、

弘化二年（西曆千八百四十五年）六月象山は蘭人「カルテン」の著はせる砲術書を讀みて砲術上悟る處ありたりと云ふ。象山が蘭語を學び始めてより僅か一個年にして砲術書を讀破

し得る程度に達せしは、迅速なる進歩にして勉學非凡なりしと察せらる。

弘化四年（西曆千八百四十七年）六月松代五十斤砲を鑄造するの議あり。象山藩主の下問に應じ其不可を論じ、却て蘭人「ベウセル」の説を引用し、小砲の有利なることを説けりと云ふ。

嘉永元年（西曆千八百四十八年）正月象山は藩命を奉じ、和蘭人「ベウセル」の著書に據りて三斤野戰地砲壹門十二拵人砲貳門十三拵天砲三門を鑄造し、屢々松代の西郊道島に於て試験射撃を行へり。三斤野戰地砲とは中徑二寸三分九九の球形彈丸を發射すべき野砲なり。彈丸の中徑を「メートル」式の尺度に換算せば約七十三「ミリメートル」となるを以て、砲の口徑即ち砲の内中徑は約七十五「ミリメートル」と推察せらる。明治十八年頃より全國の砲兵聯隊へ配賦せし大阪砲兵工廠製野砲及山砲は口徑七十五「ミリメートル」にして、有阪陸軍少將の考案に係れる三十一年式速射野砲及速射山砲も亦口徑七十五「ミリメートル」なり又十二拵人砲は口徑十二「センチメートル」の榴彈砲にして十三拵天砲は口徑十三「センチメートル」の臼砲なり。

嘉永二年（西曆千八百四十九年）象山は始めて西曆千八百十五年（文化十二年）和蘭版の歩兵訓練書を得て、門人蟻川賢之助木村軍太郎に講授し、其後幕府の譯官吉雄作之亟より新舶來の兵書數部を得、益々西洋流の隊伍教練の法式を研究修得して、之を西洋眞傳と稱したり。

西曆千八百十五年は有名なる佛國皇帝「ナポレオン」一世が、英國の將帥「ウエリントン」普國の將帥「ブリウヘル」等の指揮せる聯合軍と、比耳義の「ワートルロー」に於て激戦して大敗したる年にして、嘉永二年よりは三十四年以前なり。象山が三十四年以前の出版に係れる古き歩兵操典を得て、之を門人に講授したりと云へば、如何にも迂遠なるが如く感ぜらるゝも其當時には本邦にては堂々たる武士にても、天文年間に渡來せし火繩銃を珍重して、其打ち方さへ極秘として傳授し居る有様なり。加之火繩銃さへも充分に所持するを得ざりし川中島合戦時代の兵法ですらも極秘として傳授し居る有様なり。斯かる時代に象山が三十四年以前の歩兵操典にもせよ之を精讀し、西洋諸國にて軍の首兵とせる歩兵の教練を會得して始めて之を本邦へ傳播することを努めたるは、數賞すべきなり。實に象山は西洋砲術の研鑽

に熱心なると共に、歩兵砲兵連合の戦術にも意を用ひたるものと察せらる。

嘉永三年（西暦千八百五十年）二月象山は松代城南花水澤に於て衝天砲の試験射撃を行へり。衝天砲とは臼砲なり。同年四月象山は相川三浦半島を巡回し、城ヶ島、劍崎、大浦、千代ヶ崎、観音崎、猿島等に築設せる諸砲臺を視察し、砲臺の配置竝に備砲の撰定不適當にして到底實用に供するに足らざるを慨し、沿岸防禦に就ての意見書を起草して幕府へ上書せんとせしが、藩主幸貫幕府の忌諱に觸るゝことを心配して命じて差扣へしむ。

象山の沿岸防禦意見書は幸ひ象山全集中に集録せられて現存せり。之を閲讀するに象山は幕府が江戸灣（現今の東京灣）の防禦として配備せる大砲の彈道的性質及彈丸の効力を基礎として、海岸砲の種類及配備法、海岸砲臺の配置及設計に就きて其不完全なる理由を具體的に詳述し、江戸灣の灣口は幅過廣なるを以て沿岸に數多の砲臺を配置し在るも到底大砲のみにては敵艦の侵入を杜絶するを得ず、況や既設の砲臺は不完全なるを以て、徒らに敵の輕侮を招くのみと斷言し、斷然在來の諸砲臺を撤廢し、唯千代ヶ崎砲臺のみを残して浦賀港の直接防禦に當らしめ、三浦半島と房州には武略に秀で且相當に兵力を有する大名を移封して沿

岸の警備を擔任せしめ、江戸の直接防禦としては品川沖の洲に寄りたる處に、中等口径以上の海岸加農八十門配備するを得る程度に砲臺を新設し、之に連繫して佃島前の洲にも同様の砲數を配備するを得る程度に砲臺を新設し、双方より射線を交叉して射撃するを適當と論斷せり。加之伊豆の大島より下田附近までの海面又は遠州沖常陸沖等を徘徊する敵の艦隊を驅逐して、海路を安全にする必要上、西洋流の有力なる海軍を新設し、殊に當時英國にて採用せりと傳ふる甲鐵艦の必要なることを論述せり。私は象山の意見は當時の國情にありては卓見なりと信ぜり。併し藩主が心配せし如く此意見書を幕府へ呈出せしならんには、傳馬町の揚屋入り位にては濟むまじと察せらる。同年八月象山は砲術上の舊師下曾根金三郎の依頼に應じ、其門人に砲熷使用法を教授する爲に浦賀へ赴けり。

象山は浦賀に滞在中大砲の照準螺を製造せり。古き大砲にては射撃の際砲身へ射角（象山は射角のことを矢位と云へり）を賦與するに、照準螺を用ふることなかりき。其後照準螺を用ふることとなりしも、相當の器械を有せざれば製造稍困難なり。象山は如何に工夫せしか兎に角本邦にては此歳始めて製作したるなり。

同年十月象山は豊前中津藩（奥平侯）の依頼に應じ、十二ポンド野戦砲の圖案作れり。此大砲は口径十二「センチメートル」の短加農にして、攻城砲とも守城砲とも爲し得べし。

同年冬松前藩より十八ポンド長加農十二ポンド短加農鑄造の依頼を受く。十八ポンド長加農は口径十三「センチメートル」七四にして十二ポンド、短加農は口径十二「センチメートル」なり。砲の地金は孰れも青銅なり。同年十二月象山は松代へ歸りたり。此年幕臣勝麟太郎（勝海舟）入門す。

嘉永四年（西暦千八百五十一年）二月象山は松代の城西に於ける生萱村に五十ポンド石衝天砲の試験射撃を行へり。此大砲は中徑九寸の中空球形の彈丸を發射すべき臼砲なり。彈丸は偏肉にして肉の薄き處に穴を穿ち、之に木製の曳火信管を嵌裝し、彈腔内には火藥を填實せり。彈丸は偏肉なるが故に發射せられて落下するときには、彈肉の厚き部分を下方に向けて地面に落達するを以て、既に砲腔内にて點火せられたる信管の火は消ゆることなくして、彈丸が地面へ落達する頃には、彈腔内の火藥を爆發して彈丸を破裂せしむるなり。試験射撃の成績良好にして彈丸は地面に落達する頃に破裂せりと云へり。信管の火道の長さの定め方

が餘程手際なりしと認めらる。

同年四月象山は江戸に到り、木挽町五丁目に私塾を開き、専ら兵學及砲術を教授し、特に海防の方策を講述せり。名聲甚だ高し。越後小林虎三郎、長州吉田寅次郎入門せり。寅次郎は有名なる吉田松陰先生の通稱なり。

同年十月象山は礮學圖編を著述し、書中各種の大砲に就き所用の彈丸、信管及裝藥の藥囊の構造等を尺度重量を附記して懇切に圖解せり。現今にては斯くの如く兵器を圖解せるものを兵器制式圖と稱し、製造所は制式圖に準據して兵器を製作し、兵器本廠は検査官をして製品を制式圖に照して嚴格に検査し、合格せるものを受領することとせり。今より六十四年前の嘉永四年に於て象山が發射毎に消失すべき彈丸信管等の如き消耗品に對してさへも、製品の良否は大砲の命數、射撃の成績に大なる影響を及ぼすものなることを慮りて、精確に制式圖的の圖を作り、之に尺度重量等を附記したるは注意周到なりと云ふべし。

同年十一月象山は上總國姉崎に於て新製大砲の試験射撃を行へり。成績概ね良好なりしも松前藩の依頼に應じて鑄造せし大砲を發射するに當り、不幸にも砲身破裂して負傷者を生じ

たり。當時に於ける本邦鑄物師の技倆にては青銅にて等質無疵の大砲を鑄造することは容易なる業にてはあらざりき。されば體積の大なる大砲を鑄造するには頗る困難を感じたるものと思はる。實に象山は蘭書に記述せる鑄造法に據りて懇切に指導したりしと雖も、自身も素より鑄造術に精熟したるにも非ざれば、意外にも砲肉内に地金の著しく不等質なる部分ありしか、又は氣泡の疵ありしかに因りて、遂に破裂の不幸を醸したるものと推察せらる。又大砲破裂に關し象山と松前藩の老職某との對談なりとして面白き話が傳へるゝがそは茲に省く

嘉永五年（西曆千八百五十二年）閏二月象山は佐賀藩（鍋島侯）の依囑により、二十ポンド砲の砲架及海岸砲の砲架の雛形を作りたり。

同年五月象山は藩の二十拇天砲及同人砲を借用し、府下大森海岸に於て射撃を行へり。二十拇天砲とは口径二十「センチメートル」の臼砲にして、二十拇人砲とは口径二十一「センチメートル」の榴彈砲なり。

同年十月象山は砲理を以て易象に擬し、礮卦一篇を著はし大砲の必要を述べたり。書中に蓋兵法以て守攻。以て攻守の語あり。當時漢學の隆盛極度に達せり。曩きに長崎の人高島四郎

太夫即ち高島秋帆先生は、和蘭人より傳習したる西洋流砲術の有益なることを首唱して、國家に功勞ありしに拘はらず、漢學者烏居某に讒せられて意外の災難を受けたり。象山は元來漢學者にして特に周易に精通せる故に、殊更に意義深遠なる易象を引用して砲理を説き、以て世人を覺醒して大砲の必要を了解せしめんと欲せしなるか、象山全集に據れば象山が官許を得て礮卦を公刊せんと欲して頗る苦心したること明かなり。

此歳象山は幕府が和蘭人「スチールチース」の著はせる陸砲書を購求したりと聞き、請うて之を精讀し、書中に記述せる方法に據りて新たに六斤地砲及十二拇人砲を鑄造し、翌嘉永六年春府下大森に於て試験射撃を行へり。六斤地砲とは口径九「センチメートル」五二の加農にして十二拇人砲口径十二「センチメートル」の榴彈砲なり。

嘉永六年（西曆千八百五十三年）六月三日米國海軍提督（ベルリ）軍艦四艘を率ひて浦賀沖へ來航せり。翌日未明象山は浦賀の騷擾甚しきを聞き、急遽藩邸に到り定府の藩老望月主水に請うて、狀況視察の爲浦賀へ出張し、詳細に彼我の實況を視察して、同月六日浦賀より望月主水へ宛て精確なる報告書を發送せり。其報告書は象山全集下卷に集録せられあるを以

て、之を閲讀するに流石に西洋の事情を知り、且軍事上の新知識を具有せる象山自身の視察だけありて能く要領を得たり。

同年夏薩州藩象山に諮りて八十斤老榴地砲を鑄造せんとす。象山圖案を作り之れに跋を附して贈る。八十斤老榴地砲とは口徑約二十二「センチメートル」の加農にして、耳付きの中球形榴彈を用ふる大砲なり。

同年冬長州侯の依頼によりて十五拵長榴彈砲を深川に於て鑄造す。十五拵長榴彈砲とは口徑十五「センチメートル」の長き榴彈砲なり。

嘉永七年（西曆千八百五十四年）四月象山は門人吉田寅次郎の洋行事件に關し、幕府より揚屋入を命ぜられ、同年九月在所松代へ蟄居を命ぜらる。

歐洲に於ては佛國皇帝ナポレオン一世の没落以後暫く戦争無かりしが、此歳露國の「クリメヤ」に於て英佛連合軍と露軍との戦争ありたり。

象山は蟄居の身なりと雖も、憂國の志一日も止むことなく、常に蘭書に就きて兵學科學の研鑽に努力せり。安政五年（西曆千八百五十八年）同藩の銃工片井温の創意せる後裝銃を改

良して、軍用に堪ゆべき後裝銃を工夫し、之を迅發擊銃と稱せり。同年十月迅發擊銃の圖説を著して幕府の大老井掃部頭へ獻呈せしに、掃部頭は一ヶ年を経て翌安政六年六月蟄居人の著述獻上不相成とて折角の發明を却下せり。

安政六年は西曆千八百五十九年に當れり。此歳歐洲にては佛國皇帝「ナポレオン」三世は「サルヂニア」國王「ヴィットリヲ・エマニユエル」二世を援助し、「マゼンダ」に於て塙國軍を撃破して、伊太利に於ける塙國の勢力を一掃せり。初め「ナポレオン」三世は深く慮る所ありて、密かに機會の到るを待つ處に、恰も良し安政三年即ち西曆千八百五十六年に砲兵將官「ラヒット」は、在來の口込砲を改良し、砲腔へ六條の腔綫を設けたる新式の青銅製口込砲を案出し、其彈丸には彈體の外面向彈翼と名くる特種の裝置を施せる長彈を用ひたりしかば、試験の成績頗る良好にして砲の威力著しく増進せしを以て、機敏なる「ナポレオン」三世は直に此様式を採用し、迅速に多數の四ポンド野砲及十二ポンド加農の製造に着手せしめたり。故に塙國に對して戦争を始めたる際には、既に四ポンド野砲三十二中隊十二ポンド加農二中隊を使用し得るに至れり。之に反し塙國軍にては依然舊式の口込砲にて彈丸は舊式の

球形彈を使用せしを以て、大砲の威力に懸隔ありて遂に撃破せられしなり。後年本邦陸軍にて使用したる四斤野砲は前述の四ポンド野砲にして俗に「ナボレオン」加農と云へり。

萬延元年（西曆千八百六十年）正月松代藩の武具奉行より大砲改鑄、同鑄立、火藥製造等に關する意見書を藩主眞田幸教に呈出せり。此意見書は象山の起稿する處なり。其全文は象山全集上卷に在り。

同年三月象山は櫻賦及觀櫻賦を作りたり。其後櫻賦は長くも、天覽の榮を得たりと云ふ。象山の感激察するに餘りあり。

文久二年（西曆千八百六十二年）十二月象山は蟄居九年にして、漸く幕府より赦免せられたり。蓋し幕府は京都の干渉を受けて覺酷したるものゝ如し。此年象山は洋書に據り西洋馬術を研修せり。

元治元年（西曆千八百六十四年）三月象山は將軍徳川家茂の召命によりて上洛し、同年七月十一日京都三條木屋町を騎行中、突然刺客の害に遭ひて逝去せり。此年歐洲に於ては普國王「ウイールヘルム」一世は獨逸聯邦統轄の雄圖を實行する序幕として噠嗎軍を撃破し、「シウ

レスウイヒ」「ホルスタイン」兩公國を獲得し嶄然頭角を露せり。因に述べん、普國にては西曆千八百三十六年（天保七年）頃より、旋條後裝銃（銃身の内面に腔綫を設け、彈丸と製藥とは分離せずして一體とし、銃身の後部には、開閉し得る遊底を裁置したる元込の撃針銃なり）を秘密に試用し、西曆千八百四十一年（天保十二年）には之を軍隊へ配賦したるを以て此戰爭には始めて旋條後裝の撃針銃を使用し、軍備不完全なる噠嗎軍を撃破して偉功を奏せりと云ふ。

以上は象山先生が國家に貢獻したる西洋流砲術に就て、其事蹟の概要を述べたるなり。實に先生は終始一貫西洋流砲術及び兵學に着目し、根本的に之を研究應用して、國家に貢獻せんと熱心に努力せり。私は、天保弘化嘉永安政頃に在りては非凡の英傑に非ざれば、先生如き活動をなすは甚だ難しと信ず。眞田幸貫卿が、修理は疵があれども英雄なりと云ひ、吉川松陰先生が、佐久間修理と申す人頗る豪傑卓異の人に御座候と云ひ、又勝海舟が爲人英邁不群一見其偉大たるを知ると云ひしは、蓋し適評ならん。

蘭學者としての象山先生

文學博士 新村 出

私は和蘭語學及び外國語學の方面から、象山先生を御紹介することになつたが、象山先生を以て蘭學者と観るのは、聊か先生に對して物足らぬ憾がある。然し、單に語學者としても又外國語學上の事業家としても、先生には、表彰すべき資格が充分あるから、此の方面のことを三四十分略述したいと思ふ。

さて、象山先生が如何にして蘭學を學ばれたか、又研究後如何なる書を読まれたかの問題は、之を増澤君及びその他の諸氏の講演に譲つて、私は、先生の語學そのものについて述べようと思ふ。只一言附加して置きたいことは、先生の愛讀書の二三についてである。先生の愛讀書は如何なるものであつたか、又現在愛讀遺書として保存されてゐるか否かは、詳かに述べることは出来ない。が先生の愛讀書の一つにヨハン・ゴットフリード・ゾンメル U.G.

Sommer)と云ふ人の宇宙書がある。此の書については先生の詩文集の彼所此所に引用され、その文章や消息の中にも誌してある。之は天文、物理、地理等に關する書物で、三冊より成つて、象山先生の科學の知識の基礎は之に由るのであるから、先生の學術を尋ねる上に、有用な書と思ふが、現存してゐるか或は埋没して了つてゐるか、それは詳かに解らない。又兵學書で、先生の愛讀されたのはカール・フォン・デッカー(K.V.Decker)のものである。此の人はナポレオン戦争の時、プロシヤ軍の大將で、兵術に關する有名な著述家であるが、此の人の著書の蘭譯によりて先生は兵學の研究をされた。又、先生の製造化學、及び工業上の知識は、先程青柳教授の御紹介された様な、ノエル・ショメール(Noel Chomel)の百科辭典によつて得られた。ショメールといふ人は今日の白耳義人か佛蘭西人か確かな所は不明であるが、兎に角佛蘭西語系統の人であつて、別に獨立した専門學者ではなくて、百科辭典の編纂者である。此の書の出來たのは第十八世紀の後半であるから、象山先生の時代より七八十年前の出版になつたもので、その後版を重ねる毎に訂正増補はしたものの、象山先生の當時には可なり陳腐なものであつたに相違ない。この書は文化文政年代日本で翻譯されたのであるが、

その翻譯事業は後の帝國大學の歴史に大なる關係があるものである。

さて、以上の砲術及び工業上の知識を得る爲めに、先生は蘭語を學ばれたのであるが、その師事された人は黒川良庵といふ人で、氏は先生よりも數年若い青年で、加州藩の醫者であつた。當時、蘭語を教授する處では、江戸の坪井信道と杉田成卿の二大洋學家であつたが、前記黒川氏は坪井の門下生の一人で、象山先生自身の言によれば、出藍の譽ある異才で、坪井、杉田兩先生も驚嘆して居られたのであつた。後長崎のシーボルト氏(Siebold)につきて洋學特に醫學を學び、その天才を發揮し、後、蕃書調所の教授となり、明治初年に至つた。此黒川氏に象山先生が御つきになつて蘭學を學ばれたのは、弘化元年六月頃の事で之を機會として科學を習はれたといふ記録がある。所が先生の驚くべき才幹は、此の方面にも現はれて、同元年六月より二年二月頃迄の八ヶ月間に、蘭語に通ぜらるゝに至り、それより種々の基礎學を原書で讀まらるゝ様になり、之を端緒として、名著や原書を讀破されるに至つた。

然し、私は、象山先生の蘭學勉強の經歷についてよりも、主として、語學そのものに関する事業を述べたいと思ふ。嘉永安政年間、米艦の來訪以來、國防及び海外の學術技藝に通ず

る必要上、洋書を読むことが益々缺く可からざる緊要なことになつて來た。之が爲めには、先づ外國語の字引が入用であるが、完全なるものが日本にはない。象山先生は、此の點を觀て、辭典を出版して、容易に萬人の手に入り易からしめようと思つて、藩主に願ひ藩の力で外國語辭書の出版を成就せしめんと計畫されたのである。かゝる翻譯と、その出版の事業は、先生の確かに時世に先んじた識見の人たることを語るものである。之より先き半世紀ばかり以前に、和蘭語の辭書の日本譯が出た。それはハルマ(H. Hulma)といふ蘭佛兩語對照の辭書で、之は寛政八年に鳥取の稻村三伯(後、海上隨鸚)等の手に成り江戸で翻譯して出版したものである。當時三十部を出版し今その一部は現在、大槻博士の所藏になつてゐる。その寫本の一部は、我が京都帝國大學にも藏されてゐる。所が此の字引は餘りに字數が多過ぎて初學者にとつては不便少なくなかつたので、海上氏の弟子なる藤林普山といふ人が、その中より比較的有用な字句を彙集して、譯鍵といふ名を附して簡単な辭書を百部公にしたのである。之によりて當時の學者は多大の便宜を蒙つたが、之とても、容易には得難い上に尙、誤謬が少くなかつたので、その後十數年を経て、長崎の和蘭人に、ハルマの改譯をさせて新辭

書の出版を企てることになつて、文化八年(象山先生の生れた年)、幕府は、長崎の商館に滞在してゐるドウフ(Doeff)といふ人に、此の事業を命じた。ドウフは、ナポレオン戦亂の結果、和蘭船の我國への來航が一時中止せられし爲め、十數年間、日本に滞在するの餘儀なき事情になつたので、此の命を奉じて、文化十三年に之を完成した。これが、其後象山先生が出版せんと企てられた辭書の原本である。で、先きの海上氏出版の辭書を「江。戸。ハ。ル。マ。」といひ、長崎での翻譯は、之を「道。富。ハ。ル。マ。」若しくは「道。譯。ハ。ル。マ。」と呼んで、先きの海上氏出版の江戸ハルマと區別した。之が象山先生が利用せられた辭書で、ドウフが主となりて長崎の翻譯者が獨力で完成したハルマ原書の譯本で、その寫本は今日も尙傳はつてゐる。當時に於ては、此の辭書も尙少數のほか流布しないで、長崎の奉行所と、江戸の天文臺とに各一部宛あつた位で、世人はこれを争つて寫さんと試みたものであるから、之が爲めに象山先生が勞力も金も時も投じてその出版を企てられたのは、確かに先生の卓見である。然し、象山先生は、之をそのままに出版せんとせず、ハルマ、マーリンを始め、その他の蘭語の字引を買ひ入れて、之を訂正増補せんと期せられて、その費用一千二百兩を藩に請求せ

られた。然るに、尙當時、洋學に對する反對の氣運旺んで、幕府の許可なくして蘭語の翻譯出版は出来なかつたので、先生は藩主幸田侯を通じて、之が請願を幕府に致されたが、幕府が、之を許さなかつた爲めに、象山先生の企畫は只卓見として終り、事實として實現されることが出来なかつた。然し、此の辭書は、その後五年を経て、即ち安政二年に、桂川甫周なる蘭學者の手によつて「和。蘭。辭。彙」といふ表題で出版されるに至つた。之に續いて、又譯鍵とハルマの長所を蒐集し、之に改訂増補して、蘭語辭典として出版されたものもあつた。而して、之が率先者は、象山先生であつたことは語學史上、特別大書しなければならぬ。象山先生は、幕府の不認可により、失敗せられたが、益々發奮して、更に大々の計畫を立てられ「皇。國。同。文。鑑」といふ比較大辭書の編纂に着手せられた。即ち、英、佛、露、獨、印、土、滿(洲)の各國語を對照した大辭典の編纂である。普通なれば、先きの蘭語辭典の失敗に挫折するのであるが、更に發奮して、大々の企畫をされる先生の意氣は、只管感服の外はない。されど之も計畫のみで、實現することは、出来なかつた。然し、其時參考として使用されし書又は利用せんとされた書の、一二は、今日階下の展覽會場に列べてある。此の書の題目は、

支那の乾隆帝の欽定同文韻統と、同じ乾隆帝の滿洲蒙古支那三語の清文鑑との二部の辭典より採られたものである。

尙、も一つ注意すべきことは、象山先生が、その門下生の内から、日本に於ける最初の佛蘭西語及び獨逸語研究者を起したことである。嘉永初年、松代藩の醫者で村上英俊といふ人が、(此人はもと下野の人で、蘭語は象山先生よりも先きに學んだ人である)さる化學書を読まんとしたことがある。それは、瑞典の有名な化學者のベルゼリウス(J. Berzelius)の化學教科書で、之は歐洲の諸國語に譯されたものであるが、當時、日本には之の蘭譯はなくて、佛語のものがあつた。村上氏は、之を讀まんと思つたが、佛文は讀めないから、和蘭に、蘭譯を注文せんとした。すると象山先生が言はるゝには、「書物が來るには一二年はかゝる、佛蘭語を學んだ方が早い、加之、佛蘭西は學問が進歩し、特にナポレオン戦争後、兵術砲術の方面も進んでゐるから、佛蘭西語を習へ」と、大に村上氏を刺戟されたので、村上氏は、佛語の文典から始めて、之に通ずるやうになつた。氏は我國に於ける佛語研究者の開祖で、後蕃書調所の教授に任ぜられ、又明治以後帝國學士會員にもなつた人である。以前に、文化十

二年即ち道富ハルマ翻譯の前年、佛語辭書の公にせられたものがあつたが、之は學者の手に成りしものではなく、通詞の事業であつた。然るに村上氏の力によつて、元治元年に、五六冊よりなる「佛語明要」が出版されて、我國の語學史上に新記録を残したのである。更に同氏は、蘭、佛、英三國語を對照して、三語便覽や、その他五方通語等の辭典を著はしたのである。以上の村上氏の事業は、象山先生の奨励と刺戟とになつたものであるから、象山先生の「皇國同文鑑」の事業の一部と見做してもよいものである。象山先生は、佛語學者を生んだのみならず、加藤弘之博士の如き獨逸語學者をも間接に育成せられたのである。象山先生が、語學に精通せられてゐたことは、村上氏の三語便覽には誤謬があるといふことを、一知人への手紙の中に書かれてゐることも知ることが出来る。

終りに、象山先生は、語學に精通されてゐたばかりでなく、讀書に親しまれた人であつたソンメル(Sommer)の宇宙書などは、先生の心酔された書物で、反覆精讀されたものであるが、後には、之は通俗書であるから、も少し専門的なものが欲しいと、勝海舟が長崎に行つてゐた時に、先生は松代から、彼に手紙をやり、此以上の専門なものを送る様に寄越された

ことがあつた。かくの如く、先生は讀書の時に、所説そのままを以て満足されず、更に、それ以上の高さや深さを追求して止まなかつたのである。

以上、蘭學者としての象山先生について、略述した次第である。

初版公行の後十数年を経たる今日に至りて一讀するに増訂を要すべき點多々あれども、姑く魯魚の誤を正すにとどめて敢て他に及ばず。(昭和五年十一月新村出職)

蘭方醫家としての象山先生

宮 本 仲

今茲に開催致されました象山先生遺蹟表彰會に於ては、既に我が邦稀有の偉人象山佐久間先生の其人と爲り并に經歷事蹟等、各側面に就きて諸博士方より御話に相成まして愈々分明と爲りました。私も此御催しに従て醫家としての側面を御紹介する役割に當りました。私は甚だ光榮に存じます。故に従來承知致し居る事を綿密に申し演べて之に報いたい積りですが、

何分時間に制限があります故其意を盡さず、遺憾ながら極要點だけを摘みて御話しする積りです。其足らざる所は宜しく御諒察を願ひます。

私は象山先生に對して特に先天的崇拜者であります。故に先生の事蹟に就ては大に聞見を重ねて居る積りです。其先天的崇拜とは些と變な辭でありますが、實は私の曾祖父伊木三郎右衛門と申すのが先生の父君なる一學先生の門に學んで、ト傳流鎗術の皆傳免許を受けて佐久間家とは親子の如き間柄と爲りました。其一學即ち神溪先生の令息が象山先生で三郎右衛門の長男億右衛門と申すのが數ヶ月の差で誕生し、先生には乳不足億右衛門の方は乳多であるから、特に隣保の間柄毎日數回互に來往して過不及相ひ償ひました。夫故此兩兒たる方々は終生兄弟の義を以て親しく交際されました。其婦なる人が私の祖母で又私の祖父は先生と親友、又父は門弟子、加之ならず佐久間伊木宮本皆な一町内に隣接し居る家である。特に先生の號たる象山々麓に私も成長したのであります。而して先生の號の因て來る所は世人陸象山を先生が欽慕して其號を襲はれたかの様に察し居る方もある。けれ共決して然様で無い。即ち其住宅の西南に接して聳えた小山の名に因みて出來たのである。其小山は形狀臥象に似

たるを以て、土人之を象山と唱呼し居る次第で、其昔明僧木菴が來りて此山の麓に黃檗宗の寺を建立し、且つ數年間居住した。之を象山惠明寺といひます。此山は兒童好適の遊戯場で象山先生の幼時は日々此山に登られた。年長するに及んでも其愉快さを回想して忘れ難い所からして遂に取つて以て號と爲された次第です。此山は現に私の所有地の屋敷より川一筋隔りて接續して居る。そして象山先生の學堂が象山書院、私の廬が象山堂というた。斯様に關係が深いから、即ち崇敬の念が先天的に存して居るのでありませう。斯様であります故、佐久間家のこと先生のこと等に就ては皆様よりは多少詳しく承知して居る。故に緘密に御話すれば随分感興多き事もある。既に増澤先生青柳先生等より御話に爲つた所も誠に御調査が行届いて敬服拜聴致しました。それに附け加へて餘談ながら一寸一言お話しして見たいと思ふ所がある。即ち只今迄のお話は先生の智とか又は勇とか意とか申す向きが主の様に承りましたが、私の演題は醫家としての先生でありますから、仁とか情とかいふ點を専らに擧げて申し陳べる積りです。故に本文に入る前に先づ先生の家庭の状況を、即ち一言すれば父嚴母慈子孝と申す立派な家庭で、先生の父君神溪先生は文武兩道に長じ其性行は古武士の風があつた。

殊に易學に秀で卜傳流鎗術の師範家であつた。家格は士分以上ではあるが或事故の爲に佐久間家は小給に減つて、唯五兩に五人扶持といふ士分には類例少い少祿と爲り居つた。従つて勝手元甚だ不如意であつたが、父大人は其子を教ふることを最も嚴で且つ全力を傾注せられた。併し先生の廿二歳の時逝去せられた。母公は藩の足輕荒井氏の娘で初めは妾であつたが其爲人が偉かつたので遂に正妻に直つた。此方は實に強記で先生が幼少時に父君から經傳の素讀を授けられると、其側に居つて針仕事など爲しつゝ之を聞き覚えて、其後先生が復讀する時に少しでも間違があれば即ち其誤を正したといふ程であつた。加之其氣性が非凡であつた。例へば先生が二十三歳にて始めて東京遊學の藩命を受けた時の如きそれである。即ち並大抵の女性であるならば、其前年には夫に死別し今日は杖柱と頼む一子に留別するといふ際ならば、少くも一滴の涙位は浮べるが常でありませうが、然るに先生の母君は其別に臨んで儼然として言はるゝに、「啓之助よ、汝江都に到らば學を勉め徳に進み以て其身を立てよ、然らば余は汝が我が側に奉養し居るよりは大に孝道たるを喜ぶ、乍去萬一にも學を怠り徳を敗ぶるが如き振舞あらば、最早今日を限り歸りて見ゆることを許さぬ」云々と諭されたと申す

ことです。此氣性は如何です實に女丈夫といはねばならぬ。嚴慈共に兼ねたる此訓誨には象山先生も一層感奮せられて、聖堂に在る頃非常な勉強を爲された。大槻磐溪先生など佐久間といふ男は何時眠るのか判らぬというて其勉強に感心なされたといふ話です。其結果二十六歳には立派な儒者と爲りて錦歸家塾を開かれました。一齋先生も既に之を認許した。

却説、象山先生は學和漢洋を兼ねて夙に世界の大勢を洞察せられ、慷慨憂國遂に天下に雷名を轟かされた。實に先生は天下を以て憂と爲し天下を以て任ぜられた。其視る所其懐ふ所甚だ遠く且つ大であつた。然るに又他には醫學の如き緻密なる學問の研究にも留意せられたといふに至つては感服の外無い。精粗細大之を觀察して皆漏す所無く、之を履行しては敢て達せざる無く、如何に先生の視界が廣大であつたか腦力が旺盛であつたかが測り知られる。但し其偉大なる材能を限り無く用ひねばならぬ程天下多事であつた時に方つて、何故に先生が恰も閑日月あるが如くに醫療の事に意志を向けられたか、孰れ夫れには一の動機があつたであらう。乃ち私の察する所に據れば、先生は初めより醫術を行つて見たいと云ふ志望を起して醫學を學べたのでは無い。しかも西洋の學問がして見たい、それには醫學より入門せ

ねばならぬ。其必要上より醫書を繕き遂に醫學を覺えたから、從て仁術を施す上に於て愈々興味を感ぜられ、是に於て初めて醫家としての象山先生が出来たのであらうと思ふ。全體象山先生は陽明學は嫌ひであつたが、併し、先生の氣性は偶然にも彼等と一致する所があつたものか一度知つたことは必ず之を行ひ、覺えることが出来れば、即ち之を實地に試して見ねば氣が濟まぬといふのが先生の素質であるから、何事に限らず、飽くまで探究せねば止まないものである。故に醫書を読んだ時漢法の如き空理空論ならばいざ知らず、泰西の醫學は實說實理であるから、先生は之を信仰せずには居られ無い。而して信念益々厚きに至つては更に之を實地に應用して見たい、即ち治療して見たいといふ觀念を喚起されずには居られ無い。先生の詩に「我亦中年有所感。時披海分濟生書」といふ轉結の分があつた。即ち洋書を始められた時が始めて武歩を醫道に踏み込まれた端緒に違ひあるまい。

先生の初め洋學に志を立てられた頃は、當時の法令として醫書に非ざれば濫りに洋書を購ふ能はず、又之を學ぶにも醫家の門を叩かざれば其師と頼むべき人は他に一名も無かつた。乃ち先生は最初坪井信道氏の許に蘭書即ち醫書の手續きを受けられました。同國手と先生と

は元より知己であつた。次で杉田ノ成卿氏にも學ばれた。當時先生はお王ヶ池に家塾を開いて居られ、坪井國手は深川、杉田國手は麴町に、各々遠隔し居つたが先生の熱心は巖をも透す勢で、旬に月に幾回と無く通學された。しかもそれが三十三歳なる大儒者でありながら茲に一介の青書生と還り咲きを致されたのだ。人力車も電車も無い交通不便の時世に其勢力は驚入つた次第であります。但し數月の後先生は坪井國手に相談して曰く、「當今の時勢一日も疾く發達して國家に貢獻したい、就ては通學の時間が惜しい、何にか近道に習ふ便利はあるまいか云々」と國手乃ち答へて曰く、「天佑なる哉恰も我が塾生に黒川良庵在り、未だ年少ではあるが嘗て長崎にも居りて蘭學は佳世に出来る、之を貴塾に招き入れては如何、併し黒川は未だ漢學力に乏しい故に蘭學の御相手致す代償として漢籍を教へて貰ひ度い云々」と、答へて直に兩者を紹介して呉られた。然る處畢竟黒川氏も大恐悦（良庵氏は故文學博士黒川誠一郎氏の父君）で即日象山家塾の人と爲つた。而して朝には漢學の師、暮には蘭書の相手と相成つて、互に研究の便利を得た。斯様の次第であるから實際する醫家は甚だ多かつた。從て治療上の話も多く聞く事である。流石に聰明の先生であるから一を聞いて十を知り、忽ち其

奥儀も達せられたのであらう。

先生の醫業は江戸に在つては僅に同藩人一二位に止まつたもので、多分は、郷里松代に於て實行されたのみであります。即ち唯今増澤先生が御陳べに爲つた其御使者屋時代の末年と聚遠樓時代とであつて、其中間の木挽町時代には所謂黒船の來往横濱開港等で、象山先生も天下の憂を憂として非常に多事であつたから、全然醫業等には着手され無かつやうだ。安政甲寅四月罪を獲て其九月藩に還された。其蟄居中が即ち聚遠樓時代の大部分である。故に乞診者は竊かに裏門から縁者を介して參上する位に止まつた。先生から出診されたのは極晩年の外には無いのです。多分は同藩の蘭方醫から顧問視された様子に推せられる。藩主の公子が大患に罹つた折などに侍醫をして先生の意見を徵せしめた事など數々あつた。併し譚居中の身で拜診には出られ無かつた。而して一藩中の評判は、先生は見立ては上手で治療法にも功者だ、乍去實地練習に乏しいから偶々劔呑な事を爲さる、加之毛唐人の學術であるから日本人に之を施すのは、可畏危険な方法であると駄評された向きもある。是等は察する所漢法醫などが放つた流言であらう。斯様な妖説の起りは、當時西洋でも盛んに稱用された刺絡、

水蛭、吸角等、所謂滅殺法で血液を漏らす療法が行はれた爲めでもあつたらう。先生も好んで之を施行されたのです。其他電機療法や、當時舶齋の新薬など廣く應用されました。

先生は常に醫術を西洋流に改め無くては成らぬといふ事を鼓吹された。此は尤の事で何も先生に由て之を發明された譯では無い。既に其より以前四五十年に前野蘭化先生及其門人たる諸大家が之を疾呼して、自ら學習されたのみならず、又翻譯等も成された。其以來醫家は著名の洋學者もあつた。併し此方々は醫者であるから醫學を改良進歩せしむる目的を主と心附かれたので、象山先生の方は洋學を以て日本を開きたい、それには人々の最も早く信仰し易く會得し易い醫業に由るのも一手段であると心附かれたのが主と爲つて居る。即ち副業の形であつた。唯今新村先生の御話もある通り、先生は日本の開化を促すには洋學を勤むるのが第一着手である、それには獨習の便利の爲善い字書を容易く手に入れる様にするのが急務であるといふ所から、嘉永二酉年に其旨を藩に建言した。藩廳では大震災後費用差支との事にて採用し無かつた。先生は甚だ遺憾に思うて然らばと決心して、御自分の家祿百石を抵當として金壹千貳百兩を藩庫から借り下げて字書出版に着手された。然るに其頃幕府の方

には漢儒漢醫兩派から洋學者に邪魔を入れ居る際だつたから、天文臺の蠻書調査掛りでも聖堂の側でも其出版願を握り潰ぶして仕舞うた。即ち先生の事業は畫餅に屬した。先生は蘭書のみならず英も佛も皆な容易に讀める様に字書を作りたい計畫であつた。佛學の創始者たる村上英俊其人の如きも同藩で先生の感化を受けたのである。

段々と申し陳べた醫家としての象山先生を一言以て之を蔽へば「情の人。」又は「仁の人。」と評するに至當とする。勿論智と意又は智と勇との如き既に兼ね備はつて居る。蓋し實地醫家としては「情」と「仁」とが最も肝要で、此心が主と爲らぬに於ては決して上手には爲らぬ。又治効も舉らない。濫りに駄法螺的廣告や御世辭で他を瞞着しようと思つても長く信用を得ることは出来ぬものだ。醫者は其人格と學術とに據りて以て人の敬信を受くるのである。象山先生の信用を博せられたのも皆至誠の結果である。漢醫者流が空理空論に基いて説を喋々して居る中に、先生が洋法の實際正しき診斷治療を應用さるゝを視る時は、殊に人情厚き誠意を加へるに於ては、如何に素人でも自然之に感應して難有と念はぬものは無からう。假令百發百中といふ程の治効を見無いとしても、空論家の誤りは眞の失敗であるが、實理に基

いた分は之を天命にも歸する事が出来る。故に先生は患者に接する毎に實に親切丁寧を旨として診察をも治療をも綿密に考究せられた。即ち一二の例を擧ぐれば江戸の村上誠之丞氏が眼病を患へた時、其見舞狀中に先生は「眼科醫の説に眼より腹内宜しからずと申候とか……然る所愚意には其論甚服し不申、内障眼は必ず腹内より起り候ものに無之候、黒障に候へば視神經の麻痺に發し、白障に候へば、眼球中の液の汚濁に生じ候ものにて候へば、端的に其療治被成候方可然と存じ候、俗醫の爲めに無益の事被成まじく候云々」と申し越された。當時の醫家に於て斯の如く正理を縷述し得たものは曉天の星の如く稀に見る所である。又或小兒の頭部の腫瘍を或村醫が診治し居つたを視せられた時、先生は其不適當を論じて倉田左高氏へ紹介轉送せしめた。其文の一節に「此迄與へ候膏藥も又丸藥も餘りつまらぬ事にて、西洋を心掛け候など申すものが病症をも詳かにせず相當の醫藥をも擇ばず並々の漢方醫にても致さぬ程の投げ遣りなる療治に付云々」就ては此末の手充は貴家に於て施行して遣はされたいと親切に倉田氏へ申越されたのがある。是等から察すれば先生の治療は今日の如く開けた世と爲つても毫も學術に羞づる所が無い。又彼此へ養生法等勸誘されたものであるが、室

内換氣法とか深呼吸法とか、火鉢の炭酸瓦斯の害などとかを説かれたものもある。又先刻青柳博士の御話に爲つた電氣療治をも爲された實見がある。殊に其電氣器は御自分の製作に成れる感傳電氣である。七十年も以前電氣治法の如きは我が郷などでは夢にも之を知らぬ頃であつたのに、先生は早く既に之を拵へて實驗せられたといふに至つては唯だ敬服の外無い。實に先生は仁術は法のあらん限りを盡して視たいといふ熱心であつた。また種痘も我が郷土に安政の初年に於て實施せられた。斯く一々算へ来れば限り無いから省略する。先生は信州に幽閉された際に在つても斯くの如く世間を指導する事に熱心であつた。然るに幕府は漢醫者流が奥向に運動でも致したのか、嘉永二年に至つて禁令を發して外科眼科の他總て西洋醫術を制止した。又令して濫りに蘭書を翻譯すべからずとて梓刊事業を停止した。斯くの如く因循姑息の有様であつた。尤も數年ならずして其禁は解けた。故に先生等洋法家は内科を一般に公行した。先生は概して言へば顧問即ち多分相談を受けて指導する側に立たれたのである。右の禁令の出た頃より常に先生は長大息して曰く、腐儒は國を誤るといふて世の所謂座敷水練に成れる兵學家や、和學者が徒らに文章を修飾して虚論を逞し、文の美を以て世の

人心を惑はせる嘆すべき哉といはれた。夫の頼山陽の如き稀れに視る鴻儒ですら尙ほ外國の事に暗い結果、論鋒の間違つた空説を書くは惜むべしというて其海防策を批評されたのがあつた。藤森大雅の分などには尙更駁撃を加へられた。餘事は扱置き……

仁術に於て先生は他より一層の深情を有つて居られた實例を更に一言したい。即ち患者の歿した際先生言つて曰く、「世間の人は容易く天命々々といふけれども、而も其死たる尤も適當の診断を爲し其上有らん限りの治法を施し、加之看護十分行届いた上の死で無くては眞の天命とは申し難い、故に醫家は何卒して痛家に天命也と斷念を得させるまで、是非とも盡す覺悟を持つて居らねばならぬ、云々」と素懷に述べられたといふことです。實に實地醫家の心得として最貴い教訓である。更に又一例の情の溢るゝ如きがある。即ち一友人の病むに際し養生を勧めた文に、「御家御大切と思召し候はゞ御身御大切に成さるべく、御身御大切と思召され候はゞ酒煙御禁止可被成候」といふ一紙があつた。此れ唯だ酒煙草禁止位のこととて甚だ些の如く視ゆれども、而も能く之を玩味すれば其友情の極り無き所を視るに足るもの、即ち病者たる友人此忠告には争でか違背が出来よう。患者の一身を思ふの情が溢れて廻

りて家名までをも説くといふに至つては、其語簡なりといふも其意深遠宜しく模範とすべき所である。醫仁術也、實に情の先き立つ業である。至誠が無くては出来ぬ業である。人の疾ある己れ之れあるが如く、妻子眷族の疾苦に同情が堪へ難い業である。例へば肺病とか卒中とか全然不治の症と認め豫め家族も醫者も互に覺悟した様な患者の如きものであつても、愈々臨終といふ斷末間に及ぶ時は家族は勿論であるが、醫者の心も亦た今更の如く同情に驅られて斷念し難い程の感が起るもので、二三日厭な心地が続くことがある。即ち此同情心があるから又た何とかして全治させたいといふ心願も高まるのである。反之又た非常の難症と想つた分が快復した場合には、實に愉快千萬、我が親子でも拾うた如き心地がして其嬉しさは譬ふるに辭も無い。一大戦争で敵の驍將の首でも取つた様の心地がする。それであるから醫者は毎日々々苦樂相ひ償うて趣味甚だ深きを覺ゆるのである。象山先生も必ず此眞味を解せられて其仁術を樂みつつ施されたのであらう。茲に先生の遺稿反古中に左の如き一片があつた。之を見ても先生の人情に深厚なりしを察知するに足ると思ふ。

おのれがくすしのわざに得るところあるを聞き、すくひを乞ふもの多し。庚申のとし葉

月なかば、七さとあまり距てたる所より、あるをとこ、その女のいたくやみぬるを昇がせ来て、すくひをもとむ。あはれとおもひて家にとめおきて、手を盡しをさめぬれど、效しを見るに至らずしてつひにこゝにうせぬ。きけば子もありとぞいふなる。心の限りを盡して救ふこと能はざるは、みづからうらむるすぢもあらざれど、家なる子らが、なほおこたりなむをりもありなましと、おもひたのみたらむに、うせぬときかば、いかに嘆げかましなどおもふに、そゞろ涙のもよほされてかくなむ。

身にうけて、おもへばつらし、かくとしも、

しらでまつらん、子らがこゝろを

人すくふ、すべも知らずば、かゝる世の、

あだしなげきに、逢はざらましを

此二首は醫家としての情誼を能く言ひ盡してある。仁の術を知らざるならば又斯かる憐愍たる場合にも逢はぬのであるが、此憐愍たる場合も亦避くる能はぬは、則ち所謂惻隱の心は仁の端なりで、是れ醫家の本能と思へば止むを得ない。先生も家族への同情と醫術自身の感

想とを、斯く述べられたのであります。實に醫家は其職權の甚だ重大にして、且つ業務の崇高なるものである。而して其權力の及ぶ所は殆んど限り無い廣き範圍を領して居る。上は王侯より下は細民に至るまで如何なる階級の人でも、若し一朝病魔から侵襲を受けたる時は、皆な醫家の許に軀體の救護を乞はねばならぬ。また一から十まで醫家の指揮命令に服従せねばならぬ。乃ち養生上には醫家に高大なる支配權を與へてある、亦た重き責任をも帯びさせてある。そこで醫家は之を天賦と爲し最も公平無私に其權利と責任とを盡さねば成らぬ。一言一句一舉一動悉く謹厚にして且つ誠實なることを要す。此大なる責任と重き義務とを能く心肝に銘して、以て仁術に盡すといふ心掛けが無くては、決して天賦を完うすることは出来ぬ譯だ。象山先生は固より模範的人格を具へられた人であるから、此等の消息は遺憾無く履行されたに違ひない。今に於て其證據は明かである。想ふに先生が追年醫業を益々好まれた次第は、其神聖なる職務と高尚なる人格と相適合して、大に興味を感ぜられた結果に在るのかと推せらる。大凡醫家なるものは皆先生の如くに在らねばならぬ。斯くて信頼は招かずとも其徳風の下に集り來るのである。

餘り悲しい談話に入り込みまして陰氣と爲りました。私は情とか仁とかいふ側を陳べるのであるから話が兎角凝つて濕り勝ちに傾いた。まだく申したい事は澤山あるが先づ茲で終結と致しませう。併し終に臨んで一つ丈陽氣な所を語つて精神を發揚せんと思ふ。即ち有名なる吉田松陰先生が其高弟高杉晋作氏をして、信州松代なる象山先生の蟄居を問はしめた一條、是れは一つ芝居の筋書にでも仕組んだら面白いと思ふ程だ。即ち智仁兼備の大軍師の隠れ家に義あり勇ある少年が天下の大事を問はんが爲め、百里の道を違しとせず尋ね來りて甲は醫者乙は患者と假稱して、竊かに大訓誨を受けたといふ一幕であります。一寸其要點を摘めば安政六年春松陰は長門に幽蟄して憂憤遺る方無く其四月遂に一書を裁して高杉東行をして之を象山の下に齎らし教を乞はしめた。それは「幕府諸侯何處可恃。神州恢復何處下手。丈夫死處何處最當。」此三件が大眼目である。尤も書面には種々事情が縷述されてあつた。東行は文武修行者の名義の下に箱根の關所も碓井の關も難無く過ぎて、松代の城下まで到着した。愈々象山に面會せんと宿屋へ頼み或人の紹介を以て象山へ申込んだ。然るに譴責中の先生は公儀の掟之を謝絶した。但し表は表裏は裏、松陰の門人と聞きて一度面會したいのは

山々であるから、先生方出入の義商壽山堂山口屋甚右衛門といふを竊かに喚寄せて、且つ策を授けて曰く、高杉を急患差起りたる事として此地有名なる象山の醫療を受け度云々と藩廳に出願せしめた。恰も象山の禁錮が幾分か緩んだ頃であつたから、藩廳でも憐れ旅中の一少年其病苦を救ふとの情誼上、其相逢ふ事を默許した。幸なる哉東行、乃ち壽山堂の案内で象山幽居の裏門から乞診する事と爲つた。其病者は天を憂へた精神家其醫者は天下の利病を治療せんと欲する大國手、定めて日本將來を達觀したる卓説尤も妙療法を授けられたに相違ない。東行數週滞在して去る。其間の誨は恐らく國威宣揚には國力を養成せねばならぬ。和親にも攘夷にも彼を知り己れを知るが急務である。此兩之を全うしたる上ならでは國力の養成も完全には出来ぬ。故に開港は鎖國の結果をも意味し、和親は攘夷の端緒をも意味するものである。知れ彼知れ己は即ち兵法に所謂兩之也之を盡さずして妄に兵端を開かんとするものは、是れ國を傷ぶるの賊たるの惡結果とも爲る。故に右の意味を何て開港するは恰も是れ國威を宣揚するといふ美良なる發端であると諭された様子である。井上侯の懺悔談にも、象山先生の此卓論に耳を傾けてより、漸次攘夷の濫りに行ふべからざるを知り、初めてそれよりして

伊藤公等と洋行して西洋事情を探知して見たいといふ志を立てた。全く此決心も象山先生の賜である云々といはれた。之を聞いた私共も亦た然りだと思ふ。即ち此勇ましい一節を以て前の陰氣を打ち消し下手な長談義の結句と致します。謹みて御清聴の御禮を申します。

識見家としての象山先生

象山佐久間先生の建碑式に際し老生が先生の門下生でありたる由縁を以て、先生に就ての感想を記して送り越せとの増澤淑君の依頼に接したのであるが、老生が門下生であつたのは既に六十年前のことである故、殆ど忘却したこともあつて巨細に記述することは出来なけれども、兎に角先生は古今稀有の英傑でもあり、又何故なりや老生も非常に先生に愛せられたことでもあれば、増澤君の依頼も黙止し難く聊か申述べんと思ふことである。

尤も去大正二年十月長野縣松代にて先生のために祭典を行はれた節に、老生の先生に就ての感想は粗々申し送りたることなれば、別に今日申述べるほどのこともなければ、唯其時に

述べたることを繰り返すに過ぎぬことであるが、老生が青年壯年の頃知己となりたる人々の中には、先生と并に西郷南州との二人が東西の兩傑物であつたと思ふ。當時藤田東湖横井小南等の如きも、傑物であつたといふことは聞き居れども、是等は一面識もなかつた人であれば、何とも言へぬなれども、其論說等に就て考ふれば到底先生の如く世界の大勢を達観した人とは思はれぬ。此點に於て遠く先生に及ばぬものであると老生は見るのである。

但し西郷翁も亦世界の大勢を達観した人であるとは言はれぬなれども、それにも拘はらず當時日本社會の一大革新に就て一種の識見のあつたことは、到底他人の及ばぬ所であると老生は思ふのである。

右様の譯から老生は象山南州の二傑が、其人格性行の殆ど相似ざるにも關せず、此二傑を以て近世東西の兩大關と認めてよからうと考へる。

先生と同郷なる諸君の發起にて、今回其遭難地に先生の記念碑を建設せられたことは、全く先生の偉徳を後世に傳ふる事に於て此上もなく歡ばしき事である。謹んで諸君の勞を謝す。

大正四年十月

象山先生門下生 八十翁 加藤弘之

政治家としての象山先生

文學博士 澤柳政太郎

世人の脳裡に描いて居る象山先生は、多くは經世政治家としてであらう。象山先生が各方面に涉りて造詣深く、即ち砲術家として、蘭語學者として、又蘭方醫學者として、かく多方面に非凡であつたといふことは、今まで多くの人の想像して居なかつたことかと思ふ。殊に科學者として驚くべき知識を有し、且つ研究的精神が盛で、各種の發明や、又新奇の應用に新機軸を出されたといふことは、青柳博士の講演で始めて聞かれたことと思ふ。實に今日の講演に於てそれ／＼専門の人々より象山先生の各方面の造詣や才能や知識を紹介されて、先生の如何にも多方面に傑出されて居つたことが明になつたと思ふ。以上の講話だけで其主人公たる佐久間象山が偉い人であつたことは明瞭で、更に此上云ふ必要はないとも云へる。然るに先生の全體は未だ悉くされたと云へない。文學者としての先生については今日此席で

誰も話されなかつた。先生の文章、詩歌は、或は先生に於ては一の餘技であつたかも知れないが、實に立派なもので、文學の大家であると云つてもよいと思はれる。櫻の賦、望岳の賦の如きは先生の得意の作でもあつたであらうが、實に専門の文學者でなければ出来ぬものであらう。更に經學者としての象山先生についても、今日何人も説かなかつたが、此方面に於ても先生の學殖見識は優に一家を爲すと云つてもよからう。今日は此二方面については紹介がなかつたが、幸に象山先生の遺稿を網羅した象山全集が印刷になつて居るから、それについて見れば、能く了解することが出来ると信ずる。残る所は政治家としての象山先生である。而して私に之を紹介する光榮を與へられました。然るに最初に申した通り政治家としての象山先生は世人の既に能く知つて居る所であるから、多言を要しない、簡単に數言を以てしたなら十分であらうと思ふ。

政治家としての象山先生は如何なる政治家であつたであらうか。何人も其傑出した政治家と見て居ることは異存はなからう。如何なる點に傑出して居られたか。今日の言葉を以て言へば、先生は立派な立憲的政治家であつたと思ふ。即ち立憲的政治家の一語は能く政治家と

しての象山先生を道破し盡すことが出来ると思ふ。立憲制が布かれた今日に於て非立憲的政治家の多いのに對照し來り、五六十年前既に象山先生が立憲的政治家といふこと、それ自身先生の時流に卓絶して居られたことが明である。或は又吾々が偉大なる眞の政治家に對して要望する性格のすべてを我象山先生は具備して居られたと想像するならば、政治家としての先生を髣髴することが出来るであらうと思ふ。

吾々が政治家に望む所の第一はその經綸である。政治家は直ちに經世家であつて欲しい。象山先生は大經綸の人であつた。信州の山の奥にあつて、又蟄居の身であつて、而かも天下の大勢を達觀し、海外の事情を攻究し、以て天下國家を經綸する志が熱烈であつた。其開國進取の方針を立て、其究行を絶叫し、國防の大計を策して國家の獨立を圖り、廣く西洋の學術技藝を採り來つて我文明の新生面を開かんとせられた如き、之を當時の形勢を背景として考へて見たなら、何人も其達識と遠深と慧眼とに服せざるを得ない。實に今日の政治家に缺如して居つて而かも政治家に必要な資格を先生は完全に有して居られた。今日の政治家の多くは時勢よりも後れて居る。一步なり二歩なり時勢より進んで居る政治家は殆んどない。

時勢の進歩にイヤ／＼引きすすれて歩いて行くのが今日の政治家の有様である。而して政治家は輿論を尊重しなければならぬと云ふ。焉んぞ知らん其輿論といふのは俗論であることを。象山先生は四面尊王攘夷論の火の手熾なる時に、此俗論や迷説を正面に廻はして敢然として開國説を主張唱道せられた。かゝる意見識の百分一なりとも今日の政治家に有たせたいと思はれる位である。

先生の開國論は、幕府の有司が外國の手詰の談判に餘儀なくせられて、唱へたやうな開國説ではない。幕府有司の開國説は外國の要求を峻拒する結果砲火相見ゆることとなり、其場合に勝利を制する成算なしといふ所から出た開國論で、責任者としては尤もの説である。が、先生の開國論はかゝる苟息な、且つ一時を糊塗する小策ではない。海外の事情を研究し世界の大勢を達觀せられた上からと、我日本の將來の隆昌を期する上から、即ち遠大な抱負から出たものである。實に先生の理想が東西兩洋の長所を融合し、我國をして世界第一の國家たらしめんとする所に存したことは先生の論策や文章の上に明に現はれて居る。當時自ら進んでかゝる策論を立てたといふことは洵に驚くべきことである。

又當時は我國に於ける文藝復興時代とも云ふべき際で、頻りに我中古の文藝や古代の優秀な點が高潮せられた時に於て、西洋文明の頗る我に勝ることを認め、其採用を露骨に唱へられた如き、俗論を過重する輩の遠く及ばざる所である。又以て先生の高邁の見識と牢乎たる確信とを窺ふことが出来る。

先生の書かれた中に、今日の所謂治外法權、即ち外國人が我國に來りて而かも完全に我法に服従せざる點を憤慨し、普天の下率土の濱我王土にあらざるなき我國の歴史を傷け、我國威を損し、獨立國の體面を汚すものなることを痛切して居られるのがある。先生の開國論が決して外國の威勢を恐れたものでないことが明である。

先生の國防策も先生の見識と經世の大才より割り出されたものである。素より鎖國主義的思想から我が國防を嚴にして外國の侵入を消極的に防禦するといふ類と選を異にすることは云ふまでもない。國を開いて彼と互に通交貿易する以上、何時如何なることあるも知れない。其場合十分に國防を嚴にせざるべからずとの意見である。先生の國防策は先生が外國の軍事の情況を審し、彼我國際上の關係より畫策されたものである。全く爲政家の立場より立案せ

られたものである。維新以來我國防軍備の進歩は顯著なるもので、殊に數度の戦役に於て偉績を挙げた次第であるが、かゝる發展は我政治家の畫策に出たのでなかつた。政治家は今日迄國防上については何時でも軍人専門家の主張に餘儀なくせられて澁々同意した姿である。實に維新以後の政治家には國防上の理解がなかつた。而も大過なく、否大なる功績のあつたのは軍人の功に歸せなければならぬ。然しこれは變態であつて、國防策は主として政治家の籌畫に成るのが當然である。我象山先生には明治の如何なる政治家も及ばない所である。

立憲的政治家に學問が大切であることは云ふまでもない。所が不幸にして今日の政治家は此點に於て特に貧弱である。甚だしきに至つては政治家には學問は必要でない、政治家としての活動には學問があつては却つて仕事の邪魔になるとさへ考へて居るものがある。專制政治下の政治家には或る學問は必要でなかつたかも知れない。而かも其黒幕の内には學者僧侶等知識あるものが必ず控へて居つたではないか。まして立憲治下の政治家に學問の必要なるは明である。象山先生は各方面の學問に造詣が深かつた。これは茲に云ふ必要がない、既に前に各方面より述べられた。若し先生にして今日にあらしめたなら實に立派な學識ある立憲

政治家として一世の瞻仰する所になつたに違ひないと思ふ。

先生が單に議論の人でなく勇氣斷行の人であつたことは、四面楚歌の中に於て毅然として所信を主張して毫も枉げなかつた所に明に現はれて居る。適ま其意見が實行されなかつたのは草莽の微臣として、未だ其地位を得なかつた爲である。又先生が實行の人であつたことは多く世間に明になつて居ないが、先生が藩命を受けて佐野、沓野、湯田中三村利用掛として此小なる三村の行政を督せられた跡を見ると判る。先生の遺徳の碑は今嚴として佐野村に建てゝある。其邊の山林が鬱蒼として杉林を爲して居ることは、全く先生が當時極力獎勵された御蔭であると今尙村民はいうて居る。其他鑛山の採掘や其精錬に着手せられた跡もある。又當時地方役員の非違を匡されたことも口碑に存して居る。

今若し政治家としての象山先生に缺けて居るものがありとしたならば、恐らくはそれは現今の政治家が見て以て政治家の秘訣とする所の不得要領といふことであらう。今の政治家は不得要領で、尻尾を抑へられぬことを要諦として居るやうである。先生には此不得要領は缺けて居つたに相違ない。もう一つ今日の政治家の見て大切となす所で、象山先生に缺けて居

るものは八方美人主義、御都合主義、昨是今非主義である。先生にはかゝる主義は禁物で飽くまで明確に自分の主義主張を宣明し、變説改論や臨機應變の狡智は缺けて居た。併し一定の意見なく、強き主張なく、只管權謀術數を事とし、旨く世人を胡魔化し得ることが、果して政治家に必要な資格であらうか。直截簡明に是を是とし、非を非とし、憚る所なく其信する所を主張することは、少くも立憲政治の下に於て吾々の政治家に求むる所ではあるまいか。或人は象山をして今日尙世にあらしめば侃々諤々の論をなし他の施設を評するに止まり、即ち樞密院に地位を有する位で、實際の政治家として政治の舞臺に立つには適せず、又立つ能はざるべしと云つたとか。併し先生をして今日にあらしめば決して樞密院に隱居して奇警の批評を爲すに止る如きことは萬々ないと吾々は信する。先生が兇手の刃に非慘の最後を遂げられたことや、其前蟄居の身を以て常に天下國家を憂へて已まなかつたことを考へ見れば明白である。維新以後の政治家に至誠身を以て國家に許したものはあつたが、其見識や其主張が深き確信や廣き研究に基いたものは無かつたやうである。今日では至誠もなく意見もなく、唯操縦や權謀を以て政治家の能事とするの多きを遺憾とする。象山先生に缺けたる所は適ま

以て先生の其の政治家としての偉大なるを證するに足ると思ふ。

之を要するに象山先生は立憲政治家として申分なき人であつた。若し政治家にして時勢に追隨するを以て能事とするものとすれば、先生の如きは、隨に其人でなかつた。衆愚に迎合し俗論に阿附するを以て政治家となさば先生は決して政治家ではなかつた。然しながら經綸あり、主義あり、學識あり、勇氣あるを以て立憲政治家なりとしたならば、先生は其典型である。先生が百年前に生れて開國の大義を唱道せられたのは假令兇刃に斃られたりとは云へ、徒爾でなかつた。明治維新と云ひ開國進取の國是といひ、先生に負ふ所は實に多い。然し先生の生死は決して時を得たものでない。先生をして今日に生れ、今日に活動せしめたなら、其日本の爲に、東洋の爲に世界の爲に貢獻せられた所は非常に大なるものであつたと思ふ。さりながら、これは云ふも詮なきことである。

今度吾々同志の者が先生遭難の遺跡を顯彰し、講演會を開いたり、又象山先生の小傳を論述して公にしたりするのは、單に此偉人を追慕し紀念する爲ばかりではない、實に第二第三の象山を青年の間に、少年の間に見出さんと切に希望するからである。政治家としての第二

の象山も、科學者としての第二の象山も、西洋語學者としての第二の象山も、其他卓識家としての第二の象山も、今日の日本帝國は切に其出でんことを望んで居ると思ふ。

附 録 (二)

偉人としての象山先生

附、平賀、橋本兩先生の電氣機械に就て

(電氣三賢遺品展覽會に於ける記念講演)

工學博士 青 柳 榮 司

私も御招きに與かりまして象山先生のお話を申上げることが非常に光榮と存する次第であります。最初にお断り致しておかなければなりませんのは、私が茲に申上げるお話は主として、去る大正五年、象山先生遺跡表彰會に依つて編纂されました先生の評傳中より其の材料を得たものであることであります。同書には、信州出身の史學家増澤淑氏の編修に成る先生の傳記と共に、武田、新村、宮本、加藤、澤柳の諸先生が、夫々砲術家として、蘭學者として、蘭醫として、識見家として、及び政治家としての象山先生に就いて講述せられ、私も亦

科學者としての象山先生に就て聊か申述べて居るのでありますが、今日の講演は其等の中から適宜材料を頂戴し之に卑見を加へて皆さんと共にこの大偉人の高風を追慕致してみたいと存するのであります。どうか其のお積もりでお聴きを願ふと共に、此機會に於て右の諸先生方に感謝の意を表しておきたいと思ひます。(尙象山先生の傳記や事蹟の詳しいことに就いては信濃教育會編纂の象山全集を御覽を願ひたい。)

象山先生は今から丁度百十九年前文化八年二月十一日信州松代に生れ、六十六年前元治元年七月十一日五十四歳の時京都市木屋町二條下る處で熊本藩の河上彦齋、鳥取藩の前田伊右衛門の兩名の爲に暗殺されたのであります。

凡そ偉人の出生は、主として遺傳と環境と教育の三者に支配されるものであります。象山先生に於ても矢張さうであつて、先生の御父さんは佐久間一學と申し神溪先生と呼ばれ、ト傳流の劍道指南番を勤め、易を好み、人物も中々大きく、文武兩道に通じて、古武士の風格を備へた方でありました。家柄は士分以上でありましたが、僅に五人扶持五兩といふ小祿者に過ぎなかつた。併し御子息象山先生に對する教育は極めて嚴格であつて全力を傾倒せられ

たのであります。又御母さんは足輕荒井氏の娘で、初めは妾として仕へられたけれども、その立派な人物を見込まれ、後に本妻に直されたのであります。此方は非常な強記の婦人で御父さんが象山先生の爲めに四書五經等の素讀をされるのを傍で針仕事等をしながら聴いて居られる間に總て覚えてしまひ、先生が復習される時には、傍から其處は間違つて居る、此處は斯う直さなければならぬなど、注意を興へられた位聰明な方であつたのであります。先生二十二歳の時御父さんが亡くなられ、翌年二十三歳にして藩命に依り先生は江戸に遊學を命ぜられました。その別れに臨み御母さんは一滴の涙も流さずに、儼然として先生に向はれ「啓之助よ、お前は江戸へ行つたならば學を勉め徳を磨き、さうして身を立てねばならぬ。さすれば私の傍に居つて孝養を盡して呉れるよりも遙に大きな孝道である、若し之に反して萬一にも學を怠り徳を破る如き行があつたならば、最早今日限り縁を切り、假令歸つて來ても母は決して面會を許さぬであらう」と誠められたさうであります。この一事を以て見ても如何にこの夫人が女丈夫であられたかを窺ふことが出来るのであります。先生は之が爲め大に發奮せられ、江戸の聖堂に在る間非常な勉強をされたのであります。大槻磐溪先生などは「佐

久間は何時寝るのだらう」と云はれた位其の勉強は激しかつたと傳へられて居ります。かういふ譯でありますから、もう二十六歳の時には立派な儒者となり佐藤一齋先生の許可を得て郷里に立歸り自ら塾を開かれた位でありました。

先生が子供の時分の逸話として、家老の子供と喧嘩をされたことがあります。その爲め大變御父さんに叱られ三年間の謹慎を申付けられました。そこで先生はひどく後悔せられ、爾來一生懸命に文武兩道を勵まれたとのことあります。

一體此松代藩は幕府から屢々諸國の土木工事や殖産事業などを命ぜられた藩でありましてその關係上、數學とか測量とかいふことは比較的早くから開けて居つたのであります。それで先生は町田源左衛門といふ藩の數學家に就て先づ日本算法の奥儀を究められたのであります。この事が他日先生が西洋の科學を研究される上に非常な助けとなつたことは申すまでもありません。殊に先生は當時詳證術と稱して居つた今日の幾何學を以て萬學の基であると唱へられました。とにかく餘程數學に秀でて居られたのであります。二十三歳の上京の時迄に經學、文章などは家老の鎌原桐山に學び、又活文といふ高僧が上田の在に住つて居つた

ので、之に唐書を學ぶ爲め地藏時を馬で越えて上田まで六里の路を毎日往復されたといふこととありますが、其の熱心と堅忍不拔の精神とは實に驚くの外はありません。其他劍道は御父さんに、砲術は藤岡氏に、馬術は竹村氏に、水泳術は河野氏に習つて、二十歳頃までには何れも一廉の達人になられたのであります。

二十一歳の時藩侯に選拔されて近習役となり、二十三歳の時、矢張藩侯から見抜かれて江戸遊學の許可を受け、御暇と御手許金とを頂いて翌年江戸へ出發し、其の當時名高かつた佐藤一齋の塾に入り特に文章に就て得る所多く、又和學を加藤千浪に、書を考山に、琴を仁木三岳に學び、何れも目覺ましき上達を遂げ、さうして二十六歳の時には藩侯の命令に依つて歸國し塾を開いたのであります。先生は幼年時代に松代の藩士竹内錫命といふ人に就いて朱子學を習つたのであります。其の後王陽明の學に名高い大鹽平八郎が大阪に於て亂を起したのを見て、先生は王陽明の學の缺陷あることを認め、益々朱子學に心を傾けたのであります。御承知の通り王陽明の學は比較的精神方面に偏するものであります。朱子學は精神を重んずるのみでなく、物質をも重んずる、即ち物に就て理を窮むる學であつて、精神的であ

ると同時に科學的であつたのであります。従つて先生は形而上の學問のみを重んずる傾きのある普通の漢學では飽足らずして、形而下の科學を加へることに重きを置き、東洋の道德と西洋の技藝とを調和させなければならぬと主張したことは非常な卓見といふべきであります。これは先生がその門下生の一人たる小林虎三郎が郷里越後に歸るときに書いて與へた文章を見ても分るのであります。曰く

「宇宙の眞理に二つ無し、斯の理の在る所天地も此に異なる能はず、鬼神も此に異なる能はず、萬世の聖人も此に異なる能はず、近世西洋の發明する所の幾多の學術は要するに皆實理にして祇以て吾が聖學を資くるに足る、而るに世の儒者は概ね皆凡庸にして窮理を知らず、視て別物となす、管に好まざるのみならず、動もすれば之を寇讐に比す、宜なり彼の知る所之を知ることなく、彼の能くする所之を能くするなく(中略)、大丈夫當に大塊有る所の學を集めて大塊無き所の言を立てよ、小林炳文は予に従て遊び、而して吾が言を説ぶ者也。其歸省するに於て書いて之を贈る。」

吾々は精神的であると同時に科學的でなければならぬ。併しながら之を知るだけではないけ

ない、之を實行しなければならぬ。象山先生が之を知つて且つ實行したことは實に偉大な人物たりし所以であります。當時の儒者や武士達の多くは此事が分らなかつたのであります。翻て今日の有様はどうなつて居るか云ふと實に其の當時と逆になつて居るのであります。んか、即ち現今の人間は主として科學的方面のみに重きを置いて精神的方面の修養を忘れて居る傾向が見えるのであります。語を換へて申すならば、明治維新以後の我が教育は、科學に重きを置いたことは固より結構であるが、それと同時に必要缺くべからざる信仰教育と真正の體育即ち古來の武道の精神とを與へることを忽せにして來た爲めに、國民一般の知識は非常に進歩して西洋諸國に劣らない域に達したけれども、悲しい哉信仰教育と真正の體育とに依つて初めて得らるゝ所の情操と意志との鍛鍊が不十分となつたので、その結果先づ第一に實行力が乏しく、従つて如何に科學的の理窟は解つて居ても、その實行は頗る覺束ないのであります。例へば今日熾んに唱へられて居る合理化とか能率増進とか國產獎勵とかいふこともその實績は一向捗らないではありませんか。此時に當つて若し吾々が既に數十年前に其の範を示された象山先生の偉大なる實行力を見習ふならば、我國は非常な進化發展を來し得

るであらうことは明白なのであります。

天保九年先生は江戸再遊學を許されて、神田お玉ヶ池附近に塾を開き、傍ら一齋先生の門に出入しました。越えて天保十三年藩主眞田感應公が新に海防係を命ぜられるや、先生は願其の間役となり、大に腕を揮ふ機會を得たのであります。時に先生年三十二歳。其の時感應公から江川太郎左衛門に就て砲術を學べとの命を受けて、之に入門しましたが、先生の意に満たない點があつたので、間もなく江川の門を辭し自ら原書に就て之を研究しようと決心したのであります。そこで三十四歳の時自分よりも年少の加賀藩の醫者黒川良庵を聘して之に蘭語を學んだのであります。先生は弘化元年の六月から翌年二月まで即ち僅か八月の間基礎學の原書を容易く讀破し得るやうになつたことは實に驚くべき努力家と云はざるを得ないのであります。而も、それどころではない、更に進んで一般世人が科學の知識に通ずるやうにしなければ國を進めることは出来ないと云ふ考から、其の當時中々人の手に入らなかつた「江戸ハルマ」と稱する蘭語辭書を訂正増補し且つ之を和譯して出版しようといふ計畫を立てました。そして之には費用が千二百兩程かゝるので松代藩に其の出資を願ひ出ました

が當時安政の大震災後であつて國費多端の折柄とて遂に却下されました。先生は之に屈せず自身の知行百石を抵當にして家老恩田頼母から千二百兩を借り受け之を資金として辭書の編纂を成したのであります。其の借用證文はこの展覽會に出品されて居りますから、よく御覽を願ひます。かうして辭書の原稿が出来上りましたから、先生は嘉永二年十月態々上京して出版の許可を幕府に願ひ出でました。然るに不幸にも、西洋の學問に對する反感から漢方醫と儒者とが反對運動をした爲に、幕府でも到頭之を許さなかつたので遂に發行を見るに至らなかつたことは、實に千載の恨事でありましたが、先生の偉大なる努力は洵に後人をして感奮興起せしめるに足るものであります。

先生は勿論非常な讀書家でありました。何しろ語學を八ヶ月で稽古した位ですから、西洋の本を買つて大に讀んだのであります。殊に愛讀したのはシヨメールの百科全書（十六卷）と、ソンメルの宇宙記（三卷）——シヨメールの百科全書は東京帝室博物館に一部所蔵——とであります。後者は當時我國では幕府の天文方、薩摩の藩侯及先生の所有する三部のみで甚だ貴重な書物とせられ、シヨメールの百科全書は四十兩、宇宙記は五十五兩といふ高

價なものであります

嘉永四年四十一歳の時先生は上京して砲術教授の塾を開いたが、吉田松陰、小林虎三郎も此時入門しました。松陰は其の時二十二歳で平服の儘訪問し先生から弟子の禮を以て來れと叱られたので今度は上下を着用して行き始めて入門を許されたさうであります。松陰は兄に向つて「象山は當今の豪傑、都下第一に御座候云々」と其の感想を送つて居り又松陰の書いた幽囚録には「余象山に師事し深く其の持論に服し、事毎に決を象山に取る」とあるのを見ても如何に先生に心服して居つたかが窺はれるのであります。彼が海外渡航の企も實は先生の勸告に依るもので、土佐の漂民萬治郎と稱するものに真似る積であつたらしいのであります。先生も亦松陰を評して「忠直義烈の士」と褒めて居ります。

嘉永六年松陰は長崎から露西亞の船に乗つて外國の事情を調べに行かうと云ふので、先生に別れを告げました。其の時先生は「之子有靈骨」といふ詩を作つて、之を餞別として與へ又旅費の足しにとて金四圓を送りました。松陰は豫て先生から暗示された通り外國船に依つて海外に行く積りだつたのですが、長崎に着いた時分には露船の出帆後とて、残念ながら引

返し、右の四圓の金を先生に返して居ります。斯ういふ几帳面なことも今日の青年にとつて大いに誠めになることだらうと思ひます。

安政元年四月米艦九隻彼理に率ゐられ江戸灣に入り乗組の米人等横濱村に上陸した爲め、松代藩は小倉藩と共に警備の役に當りました。先生は命に依り其の任を果す爲め野戰砲二門天砲三門、銃卒百名、刀槍士五十名を率ゐて神奈川に繰込みましたが、幕府では米使の感情を害することを恐れて近寄ることを許さなかつたのであります。同年二月下田及び函館の二港を開くことに決したのを聞き、先生は大に下田の不利なるを述べ、横濱に代へられんことを主張したけれども、遂に用ゐられなかつたのであります。

三月三日和親條約の調印が済み彼理は下田に去つたので、松陰は同志一名と共に米船に搭乗せんと企てたが遂に失敗して獄に繋がれることゝなりました。この時先生も松陰に與へた饒別の詩の爲め、之に連坐し安政元年四月江戸傳馬町の獄に繋がれたのであります。時に年四十四歳。在獄五ヶ月、更に轉じて松代に九年間の蟄居を命ぜられました。先生獄中に於ける詩文章は省書録として、明治四年門人勝海舟に依つて刊行されたことは世に知られて居り

ます。

先生松代に蟄居中は科學の研究と實驗とに耽り、或は詩歌文章を作り、書畫を嗜み、又時には醫者として病人を治した、そこで面會者は表向は病人とし稱て先生を訪ねたのであります。一友人の病むに際し「御家御大切と思召候はゞ御身御大切に成さるべく御身御大切と思召され候はゞ酒煙御禁止可相成候」と其の養生を勸めて居るのを見ても先生が如何に親切であつたかと思はるゝのであります。

先生の蟄居中に松陰は其の高弟高杉晋作を派して先生に紹介し自分の境涯を述べ「幕府諸侯何れの處か恃むべき、神州の恢復何れの處にか先づ手を下すべき、丈夫の死所何處か最も當れる」の三項に就いて尋ねた。先生は謹慎中として表面からは高杉との會見を拒絶したが、松陰の門人と聞いて、義商壽山堂山口屋甚右衛門を喚び私かに策を授け、急患差起り象山の治療を受け度とて出願せしめた爲め藩の許可を得て面會することが出来たのであつた。この時高杉晋作の感想として「自分は今迄多くの人に交りもし逢ひもしたが、佐久間先生程儼然として威儀の正しき人に出逢つた事がない、而も其の中に拘すべき温情がある」と人に語つ

て居ります。然るに安政四年九月京都に於て幕吏に捕へられた志士五十餘名の中に吉田松陰あり、六年五月江戸に送られた爲め遂に高杉の報告を聞くことが出来なかつたのは松陰にとり定めし残念なことであつたらうと思はれます。

先生は幽閉中、前述の百科全書と宇宙記とを熟讀して、物理化學の研究を遂げ之に依つて大に科學的知識を養ふことが出来たので、その結果醫學といはず、工學といはず、農業といはず、凡ゆる方面に對して進歩せる施設を實現せしめるの基となつたのであります。今少しく其等の事實に就いて述べて見ませう。

弘化元年先生はシヨメールの百科全書に依り舶來の「ギヤマン」に當る上等の硝子瓶を造つて、それを「グリングラス」と名づけ、人に與へて居ります。同じく弘化元年、杵野、佐野、湯田中といふ三村の利用掛を命ぜられました。前述の二書に依つて得た知識を本として、土地を拓き馬鈴薯を植ゑ農藝の道を講じ、又其の他の利益を興すといふ施設に就て藩に意見書を出したのであります。其の意見書の中には、杵野の山に鐵鑛があることゝか、明礬の製造のことゝか、木を焼いて「ポッターズ」を得ることゝか、湯治人の大小便から硝石を

採ることゝか、石墨から鉛筆を造ることゝか、白根山にある硫黄から火薬を製することゝか、湯田中の「ケレート」(粘土)や石膏は陶器の材料になること等を詳しく論じて居るのであります。尤も此意見書の事柄がどれだけ實行されたかは不明でありますけれども、硝石の實驗をやつたことは確であり、又此地方の人は野生の山葡萄から葡萄酒を造ることを知つて居るのであります。之は先生から教へて貰つたのだと傳へられて居ります。兎に角斯ういふやうに慧眼と卓識とを先生は備へて居つたのであります。

更に先生はギラルチンの著書を読んで、化學分析を學び、又杵野地方巡視の際に銀坑や銅坑を發見したり、其の銀鑛を吹分けて、生野の銀山よりは鐵分が少いが亞鉛が割合に多く含まれて居るといふやうな實驗をして見たり、又先程申した三つの村の温泉の温度を測つたり分析試験を行つたりして、何れも硫酸泉であるといふことを示し、就中澁の温泉は硫酸鐵を含むから皮膚の爲に宜しいとか、一本瀧の温泉は硫酸「ポッターズ」に富んで居るから凝をとく効力があるとか、又角間の温泉は硫酸曹達があるから腹部の多血から來る諸病に効能があるとか、色々のことを調べて居るのであります。更に又この年には豫て藩命に依り西洋式

に倣つて鑄造した大砲數門の發射試験を松代城の東、道島に於て行ひました。即ち砲術等にも非常に秀れて居たことが判る譯で、其の色々の構造に就ては之れ亦本展覽會に詳しい製圖が陳列してありますから御覽を願ひたいのであります。(口繪第一參照) 嘉永二年、三十九歳の時、絹卷銅線を造つて電氣の試験をしたのでありますが、其の一片は現に逓信省の博物館に保管されてあります。越えて安政元年、四十四歳の時、横濱警備の爲め彼の地に向つたことは既に述べた通りであります。其處で米人が當時流行のダゲロ式寫眞機を以て先生の乗馬姿を撮影致しました。此機械は沃度銀に光線を働かして之に水銀蒸氣を觸れしめる仕掛のものであります。其の際先生は例の研究心から米人に向ひ、寫眞の種板を作るには沃素を用ひるか或は臭素を用ひるか尋ねたので、米人は其の博學に驚き、どうしてそんな事を知つて居るかと反問したさうで、先生も亦米人が寫眞のピントを合せるのに螺旋を使つて居るのを見て頻りに感心したとあります。先生は其の後早速寫眞機を買込んで之を留影鏡と呼び珍重しました。彼處にも象山先生の撮られた寫眞が出品してありますが、これ等は先生が寫眞機で撮つたのを複寫したのだと云ふことであ居ります。別に陳列してある油繪は

渡邊家の所藏では是は宮本先生の御紹介に依り出品を願つたものであります。先生の甥や姪に當られる人達が、この油繪を見て、實によく似て居る、全く先生に生寫したと云はれたさうでありますから、この方が確な似顔だと御考へ下されば宜からうと思ひます。

安政五年即ち四十八歳で先生は磁石を作り之を人造磁鉄と呼んで、地震報知機(口繪第四照)に應用して居ります。これも彼處に出品してありますが、御覽の通り馬蹄形をなした磁石に三角形の鐵片を吸着けさせてブラリと振子のやうに垂れて居ります。之に百三十匁位の錘を付けて置くと地震の起つた時其の機械的振動で早く豫知することが出来る、夜中眠つて居る時には之に適當な方法で鈴を付けて置けば、地震の際鈴が鳴るから目が覺めるといふのであります。之を幾つか作つて實費で人に頒けてやつたのが現今諸方に残つてゐるので、彼處に出品してあるのも其の一つであります。又同年にダニエル電池を作りました。

萬延元年、五十歳の時、「ガルバニツシエスコツクマシーネ華爾華尼衝動機」と稱する機械を考案しましたが、之に就て御話する前に、私の専門である電氣工學の立場から、先程平賀先生に就ての白井博士の御話のとき「エレキテル」に關することはありませんやうでしたから、此等を總括的に簡単に申上

げて見たいと思ひます。

平賀鳩溪先生（名は源内）は享保十四年讃岐國志度浦に生れ、今から百五十一年前の安永八年に五十一歳で亡くなられたのでありますが、偉人のことゝて高松藩を辭職の上何處か適當の地へ乗り出して大に雄飛しようとして考へて居りました。併し藩主はあれだけの才物が他所へ行くことを惜んで、暇だけは遣るが他に仕へてはならぬと命ぜられたので、己むを得ず民間に下つて自分の才を發揮したのであります。先程御話のあつた本草學の研究の外に「エレキテル」を作りました。今日知り得た範圍に於ては之が日本に於ける最初の發電機械でありませう。之はどういふ工合になつて居るかと申しますと、彼處（口繪第六參照）にも寫眞が出品されてありますから御覽を願へば判りますが、二つの圓筒形のロールがあつて、其の一方は錫箔を表面に張り附けてあり、他方はフランネルの様な布を巻き付けてあります。其の一方だけ廻すと互ひに摩擦するから電氣を生ずるのであります。此の陰陽二種の摩擦電氣を適當な接觸装置を経て、突出せる二つの線端に導き、之に鎖の様な可撓性の導電體をつなぎ其の兩端を擱んで色々の實驗を行つたのであります。先程吳博士の御話にあつた種々の實驗

は即ち是であります。よく吾々が毛糸のシャツを脱ぐ時に、之が頭の毛と擦り合つてピリ／＼と申しますが、あれは陰陽兩電氣の放電であつて、上述と全く同じ理屈なのであります。とにかく平賀先生のエレキテルは日本で作られた最初の發電機であります。これは恐らく長崎で蘭學を學び（寶曆二年）且つ其の後、長崎再遊の節購ひ歸つたエレキテル（明和七年）の知識に基いて作つたものでありませう。而して其の製作年代は安永元年（百五十八年前）頃で、今日尙二個が残存して居るさうであります。後に大阪の橋本疊齋先生が作つたのも之と同一の原理によるものであります。（後述參照）

平賀先生は又、火浣布を石綿で造り、更に寒暖計（出品）、測量機械、望遠鏡の一として反射眼鏡（出品）、源内燒（磁器、出品）等も作りました。尙又先生は素人として日本に於ける油繪の元祖で、これは直接外人から習つたものらしいとのことです。世間では司馬江漢の方が先だといふ説もありますが、彼は専門家であり、先生は素人であつて而も玄人を凌ぐ腕を示したのであります。彼處に先生の畫いた西洋婦人の油繪の寫眞が出て居ります。油繪の専門家としては豊臣時代の山田右衛門作等が我國最初の人であります。

平賀先生の顔つきは俳優のやうな面影がありますが、有名な神靈矢口渡外數種（出品）の脚本の作者として寔に故ある哉と思はれます。それから鑛山學にも造詣が深く秋田の佐竹家の顧問となつたこともあり、又秩父で鐵山の開發（記録出品）をやつたが之には失敗して、一時炭焼にまで成り果て漸く糊口を凌いだと云ふことも傳へられて居ります。序に、雜談ながら（眞偽正否は不明であるが）土用鰻の宣傳も平賀先生が始めたものださうで、土用に鰻を食ふと身體に利くと先生が云ひ觸らした爲め、一般に土用鰻を食ふ習慣が出来たものださうであります。これは恐らく只先生の頓智に過ぎなかつたのでせうが、無意味な迷信などいふものは多く斯うした有様で始まるものだらうと思はれます。又先生は或時宿屋へ泊つて宿錢を拂へなかつたので福神漬の漬け方を教へて勘辨して貰つたとか云ふ説も傳へられて居ります。或は吉原へ行つて花魁に源内節を教へ、又は源内櫛や丸髻等もさういふ巷で先生が考案したものだ眞偽は不明といふ噂であります。これは唯先生の性格を偲ぶ材料として一寸付け加へたゞけであります。

平賀先生も亦信州に縁故のある人で先生の先祖は信州南佐久郡の出身であつて、先生はそ

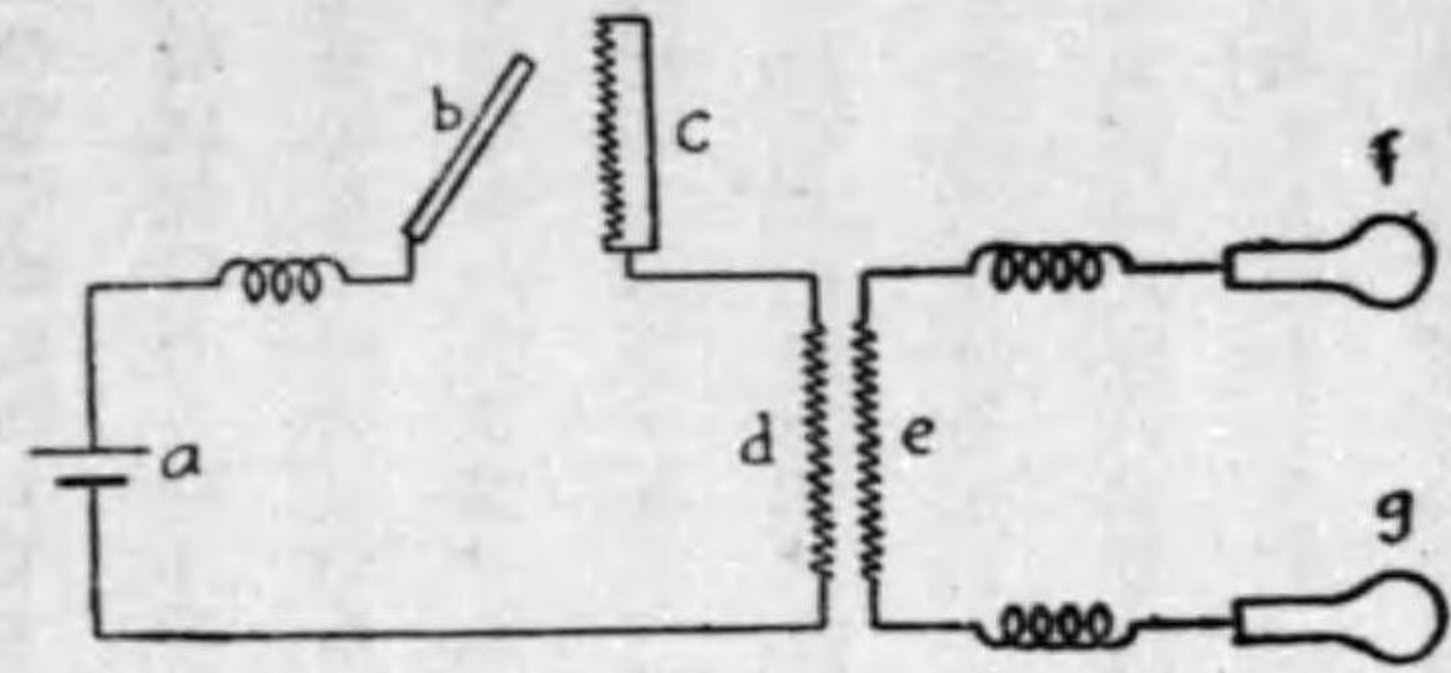
の分家なのであります。

次に大阪の人橋本曇齋先生（名は宗吉、寶曆十三年四月生、天保七年五月歿）に就ては既に吳博士から御話のあつた通りでありますから多くは申しませぬが、先生は二十歳頃某家のエレキテルを弄び、其の後江戸遊學中松原右仲の製作せるエレキテルに就て其の機用を研究したことがあります。歸阪後（文化六、七年頃）蘭書の中からエレキテルに關する記事を摘出して之を綜合し、自らもエレキテル（口繪第六參照）を作りて各種の實驗を試み之に關する著書二卷を公にし、之を「和蘭陀始制エレキテル究理原」と名づけて居ります。又蘭書に依り雷の實驗を知り門人に其の方法を授けて實驗せしめたさうで日本のフランクリンとも稱すべき人であります。先生の師大槻玄澤は幕府の命に依りシヨメールの百科全書を翻譯する際其のエ（E）の部に於てエレキテルを説明し、特に平賀先生の電機創製のこと及び橋本先生の「究理原」述作のことを擧げ極力推奨して居ります。之を見ても橋本先生の電氣學研究が如何に當時の學者間に重要視せられたかゞ窺はれるのであります。「究理原」は實に舊幕時代を通じて唯一の電氣單行本と稱すべきものでありませう。

要するに平賀、橋本兩先生のエレキテルは何れも摩擦電氣の原理に基いて製作されたものであります。さうして平賀先生は大地との絶縁に松脂の膏を用ひ、又圓筒用金屬として錫箔を用ひましたが、橋本先生は之に代ふるに鐵を以てしたのであります。

それよりズツト後になります、象山先生の作つた「ガバニツ瓦爾シエスコックウエーシネ華尼衝動機」即ち電氣治療機は前に述べた通り、此等と全く原理を異にし誘導線輪に依る感應電氣を應用したものであります。之を簡単に説明致しますと、「ダニエル」電池から發した直電氣を誘導線輪に依つて交流電氣に變へるのであります。其の構造は口繪第四圖に、又其の接続は上圖に示す通りであります。

電池 (a) の一端には電線を経て、金屬棒 (b) があり、其の他端には誘導線輪 (d) を経て、ギザ／＼の齒を刻んだ金屬片 (c) が繋がれて居る。此の金屬片は劍の様な形をなし



電機接続圖

其の次に齒を刻んだものもあり、或は圓輪となし、其の内面に齒を附けたものもあります。誘導線輪はどういふのかと云ふと、これは互に絶縁せる二つの線輪 (d) 及び (e) を重ねて巻いたもので、線輪 (e) の兩端は電線にて握棒 (f) 及び (g) に繋がれて居る。鐵心はあつたかも知れませんが今は見當りません。さて此装置を如何にして働かすかと云ふに、金屬棒 (b) で金屬片の齒面に沿うて迅速に上下に摩擦すると電池より供給される直電氣が一秒時間に何十回となく線輪 (d) 内を流れたり切れたりする爲め、誘導作用に依つて線輪 (e) 内に交流電氣が発生するのであります。此電氣を起しながら、象山先生は握棒 (f) 及び (g) の内一つを右手で握り他を患者に握らせ己れの左手を患者の患部に觸れることに依つて治療を試みられた様であります。

是より先き (安政六年七月) 獨人シーボルトが和蘭より再度我國に派遣された際齋らした發電機 (其の外見は寫真によれば多分同様の感應發電機であるらしい) を福島縣須賀川町在醫師江藤某が長崎にて米百俵と交換して持ち歸り、尙同家に傳へられて居ると云ふことでもあります。

右の外象山先生が作ったと稱せらるゝ電気治療機械が今日尙我國で三個見出されて居ります。一は逓信省の博物館に、一は松代の小學校に、一は松代の眞田家にあり、さうして彼處に出品してあるのは其の眞田家から借用したものであります。(口繪第四参照)斯ういふ物は實に大切な資料でありますから火事などで焼けないやうに何れも博物館にでも入れて保存して置きたいものであります。此装置を見るに萬年草と人形とを箱の上に飾つてありますがこれは治療上患者に善い印象を與へる積りであつたものかと思はれます。其の形にも色々あるやうであります。

此機械をどういふ様に治療に應用したかといふ一例を茲に述べて見ますと、文久二年九月一日の夜恰も松代藩へ幽閉されて居つた當時(五十一歳の時)のことでありますが、象山先生は本を讀んで居られた、すると奥さんが——奥さんは御承知の通り門人勝海舟の妹で順子さんと申され先生が四十一歳の時に十六歳で迎へられた方であります。——先生の部屋へ來られて、「どうも胸が悪くて吐きさうで困ります。悪寒も致しますし身體がぞく／＼します」と訴へられた、そこで先生は芳香酸に炭酸マグネシウムを混ぜて頓服させたけれども、吐い

てしまひ、續いて手の指や胸、肩などが痺れて來たので、先生は、虎列刺病かも知れぬと大に心配され、尙も色々薬を用いたけれども病勢が募るばかりで、終ひには精神昏沌、呼吸困難となり眼も釣上つて、まるで生きた顔つきでない、そこで先生は更にカンフル丁幾を胸や腹に塗つたり、両手を摩擦させたり、熱湯で芥子泥を造つて各所へ塗つたり荳菁膏を作つて頭に貼つたりしたら少しは良くなつたやうだけれども、まだ中々効果が無い、そこで不圖思出したのは「瓦爾華尼衝動機」^{ガルバニツシエスコツクマシーネ}のことで、之は虎列刺病に効果があると云ふことだから使つてみようかと考へ早速其の機械を取出して前申した如く其の一端を病人に握らせ他端を自分の右の手で握り、左手を病人の肩に觸れた所が、人間の身體は良導體であるから交流電氣が通つて、奥さんの釣上つた眼は元の通りに下り、呼吸も段々安らかになつたので、次には患者の額へ觸れると忽ち痙攣も止み手や脚が漸次元の通りになつた、そこで大いに驚喜し尙も痙攣が起る度毎に此治療を繰返しつゝ甘汞の下劑をかけたりにして一週間程経つと全く發作も起らなくなり、更に數日を経て全治したさうであります。然るに其の後秋になつて虎列刺が流行し、今度は先生始め召使の一、二人が多少感染の氣味があつたので、得たりや賢しと先

生は又もや右の方法を繰返して幸に無事なるを得たと傳へられて居ります。之は無論今日の醫學から云へば少し亂暴な所もありませうけれども、兎に角思切つて之を實行した所に先生の性格が現れて居ると思ひます。先生は之を喜んで次の意味のことを書いて居られます。

「自分が書物を讀まなければ醫術を知らず、醫術を知らなければ妻も自分も或は助からなかつたであらう。誰が自分に書物を讀ませて醫術の理法に通じさせたのか。これ自分が天寵を得て居るからではないか云々」

「天の寵を得た」と云ふ語は是より前にも使はれて居りますが、これは深く味ふべき言葉だと思ひます。

一體佐久間象山先生の傳記を讀む場合、現時の我國狀に照して此事が最も注目すべき重要點であると思ふのであります。何となれば人間は堅き信仰心がなければ、到底斯かる言葉を述べ得ないからであります。今日我國に於ては少し物を覺えて來ると直きに得意になつて仕舞ふ人が多い。例へば或る學校がベースボールの競技などに優勝すると頗る得意になり慢心が起り易いから進歩が止つて仕舞ふ、之は信仰のない場合に限るのであります。若し信仰が

あれば何時までも謙遜の氣分で、神明の加護や天寵であると信するが故に、決して慢心しないのであります。今日の知識階級に於て或る一の仕事を仕上げた場合に象山先生の如く神の御蔭であり。天の寵を得て居るからであると考へて之に感謝し得る人が果して如何程あるでございませうか、恐らく寥々たるもので是が實に我國現時の一大缺陷であると私は考へるのであります。

萬延元年幕府では條約批准交換の爲め使節を米國に派遣することになり、門弟たる勝海舟を船長として咸臨丸を彼地に差向けました。之が太平洋を横切つた我國最初の船であります。さうして、此事は即ち象山先生の持論の一部が實現されたわけであります。

通商條約の調印を許した井伊大老が同年三月三日殺されたので、幕府では安藤對馬守が公武合體策を以て時局を救ふものとし、家茂將軍の簾中として皇妹和宮親子内親王の御降嫁を願ひ出でたが、内親王は此爲め有栖川宮に御縁付の御内定を取止め國家のためならばとて御決心の上御許が出たので、翌文久元年冬御降嫁を仰いだ次第であります。この公武合體の結果に依つて幕府は朝廷の御命令を一々遵奉する様になつたのであります。象山先生は此際

改革を開き幕府へ上書しようとして文章を認めて居られますが、其の中には朱子窮理の學と西洋の科學とを以て世の中の學問を統一したいこと、向後外國人を斥けて夷狄戎狄など、呼ばないこと等を書いてありますが、斯く先生自身にも以前と呼び方を改めてあるのは、幽閉中によく西洋書を研究した結果でありませう。先生の前に書かれた上書や詩文の中には矢張り外人を夷狄と呼んでありましたが、此上書には改められて居るのであります。

併し世間では公武合體の後攘夷論が一層盛になつて外人を殺したり外館を焼き拂つたりするものが多く物情騒然たる有様でありました。斯かる狀勢の中に在つて敢然として攘夷を排したのは實に先生の堅き信念の然らしむる所で非常な卓見であると思ひます。

右上書の終りに國力培養を論じてありますが、其の要點を申述べると、遊民の多きを誡むること、貿易、理財、産業、力學、器學を盛にすべきこと、例へば僧侶の數を減じ、儒禮を以て喪祭を行ふことを許し、廢寺は學校に代用すること、貿易で得た利益にて海防費を出すこと、僧侶の數を減じて職工を養ひ、力學器學を應用して工場を建て、五世界の輸出品を得て行けば國力益々擴張せられ、世界第一の強國となること數年の後であると結んであるが

これは幽閉中に於ける讀書に依つて得た結果であつて、今日我國に行はれて居る所を豫言したに外ならないのは實に炯眼達識と申すべきではありませんか。

文久二年勅使を以て攘夷實行を幕府に迫られたので幕府は一先づ御受けして「攘夷と決したから策略を申出よ」と諸侯に通達しました。松代藩でも先生に内問した處が、先生は同年十二月左の如き意見書を上つて居ります。

「私共は勿論のこと楠公でも將又孔明孫子大公望と雖も攘夷の策は立ち申さず、何となれば日本は五大洲の二百分の一にも及ばず、而も外國は學術の技巧遙かに卓越し、天文、地理、船艦、銃砲制等を始めとし蒸氣船、蒸氣車、鐵道等短きも數十里、長きは千里に餘り、其の國力の富有強大なること實に驚くばかりで、之に比すれば我國の如きは恰も裸體空手に等しい有様である。我國では彼等の事情を知ることゝ忽にして居るが、私共は恐らく和蘭にも對抗覺束ないと思ふ、況んや其の他の四大強國を合せてをや、我國の今日に至れるは畢竟鎖國の罪である、故に到底此上鎖國は續けられないから、速に外國に禮儀を以て交通し、其の間に公武合體を進め、共に精勵して我國の長所を發揮し、萬國以上に秀ることが出来るやうに

なれば野心のある國々も之を畏れて跡を絶ち、或は徳化を慕うて臣服するものもあるであらう。然るに其の徳其の義如何に卓越するも國力及ばずば叶ひ難きこと自明の理である。天朝大朝共々に其の本に反り輕舉無之様」といふ意味であります。實に堂々たる論旨として敬服すべきではありませんまいか。

文久二年の冬先生五十二歳の時に至り幕府より九ヶ年間の蟄居を宥されました。そこで先生は翌年正月十日松代藩に上書して當路の無能を擧げ誠意國家の爲めを圖らんとしたけれども實現は出来なかつたのであります。

當時京洛の地たるや全く攘夷論者の巢窟であつて、少しでも軟論を唱へるものは直ちに制裁を加へられ、徒に高言壯語、所謂百補公輩出と世人に冷評せらるゝ有様でありました。斯くて攘夷論者は益々氣勢を高め、幕府の因循姑息到底爲すなきを見て御親征を願ふこととなり、殊に長州藩が風聲を擁して討幕の師を起すとの噂さへ起るに至りました。

そこで幕府も遂に象山先生の智慧を借らうといふことになり元治元年三月先生に上洛を命じました。此時門弟等は先生の危険を慮り何とか引止めようとしたに對し先生は儼乎として

「子等は余を愛するか、將た國家を愛するか、若し國家を愛するならば決して此行を妨ぐるな、余久しく草野に臥して時機の到るを待つてゐた、今や天下紛々國是一定せず、此秋に當りて國家百年の長策を建つるもの余を措いて誰かある」と叱咤して之を斥け、敢然國家の爲めに犠牲となるの覺悟を示したのであります。斯くて若干の弟子のみを連れて、西洋鞍に跨り三月二十九日無事京都に着きました。餘談ですが、京都の人で今は故人となられた内貴甚三郎氏など幼少の頃此西洋鞍の先生を見て、随分外國カブレの人だと思つたと私に語られたことがあります。斯うして京都へは召出されましたが先生は何身分の低い藩士であつた爲め、偉人ではあるけれども幕府の樞要な地位に就くことは出来ませんでした。時は丁度七月十一日先生は山階宮へ伺候した後松代藩の宿陣本覺寺(下寺町五條下る)を訪ひ、夕方木屋町の寓居へ歸らうとして馬に乗つてやつて來ると、前に申した河上、前田の兩刺客の爲めに木屋町三條に要撃せられて先づ馬の前脚を斬られ、今の象山先生記念碑のある邊まで來て馬が倒れると共に遂に無念の最期を遂げられたのは惜みてもなほ餘りあることであります。

事の経緯は先生が幕府の密旨を受けて京都に上り屢々山階、中川の兩宮を始め二條、嵯峨

の諸公卿に向つて開國論と公武合體説とを勸誘し朝廷の討幕計畫をも阻止したとの風評が立つたので、熊本藩の河上彦齋（玄明又の名を高田原兵衛カウゲンベエと稱す）は之を聞いて大に憤り、長藩の久坂（義助）と謀り、鳥取藩の前田伊右衛門を誘ひ、白晝木屋町に於て先生を暗殺し、其の斬奸狀を祇園社頭に榜示したものであります。

彦齋の生家は小森氏で父の名は貞助、母は和歌子といひ、天保五年十一月二十五日熊本城下新馬借町に生れ、幼にして河上源兵衛に養はれたとあります。彼は先生を暗殺した後左の如く人に告げて居ります。

「余人を斬ること猶木偶を斬るが如く、嘗て意に留めず、然るに象山を斬るの時に於て初めて人を斬るの思ひをなし、余をして毛髮の逆豎に堪へざらしむ、是れ彼れが絶代の豪傑なると、余の命脈既に罄くの兆にあらざるなきを得んや、今より斷然此不祥的の所行を改めて、方さに象山を以て其の手を收めんのみ」

これを見ても先生が絶代の豪傑たりしことが察せられるわけで、それ以後彦齋は決して人を斬らなかつたといふことであります。

彦齋は先生暗殺後年餘にして信州松代に赴き高田原兵衛と稱し下手人たることを伴りて佐久間家を尋ね、同家に宿泊し、先生の横死を弔し、優遇されて歸つたと傳へられて居ります。明治四年十二月四日彼は遂に終生の主義たる攘夷説の爲めに罪せられて刑場の露と消えたのであります。

斯くの如く象山先生は經世家、政治家としてのみでなく、其の他砲術家として蘭學者として蘭法醫學者として殊に科學者として將又文學者として更に經學者として何れも造詣が深かつたのは絶大なる奮勵努力の結果に外ならないこと申す迄ありませんが、幕末天下紛々たるの時に於て身を以て皇國に許し、五世界を達觀せる識見のもとに衆論を排して飽くまでも所信を斷行した所の實に偉大なる人格の根本要素と稱すべきものは、彼の孔子が五十にして天命を知つた如く、又西郷隆盛が天道に従ふと唱へ敬天愛人をモットーとしたるが如く、夙天の靈寵を感じ信仰信念を體得して居つた點にあることを見逃してはならないのであります。凡そ人は純潔なる精神のもとに一生懸命の境遇に身を處すること、生理的心理的醇化を起して神を見出すに至るものである。天と呼び、ゴツドを稱し、或は又神佛と唱ふるも歸す

る處は同一者で、即ち超人間的の絶對なる力を信するに外ならないのであります。序に私の信する宗教の意味は超人間的の絶對な力を信じ、感謝、憧憬、歡喜、満足を以て眞理を辿り理想を追求するのにありまして、而も何等其の時代の國民道德に悖らず將又科學と衝突せざるものたることを必要と考へます。象山先生は深く天を信じ異常なる精神力を發揮した爲め其の奮闘努力は實に人業ではなかつたのであります。さればこそ僅か八ヶ月間で原書を読み得る迄に蘭學を習得することも出来たのであります。弘化二年五月十八日先生三十五歳の時竹村金吾に送つた左の手紙を見ても明かに其の眞相を物語つて居ります。

「昨年来再び童子輩と罷成洋書に取掛り此節宅に差置候黒川生も歸省の事に候へば、折々深川邊迄も麴町邊迄も飛塵暑雨を避けず通ひ候て、不分明の所を搜し候様に仕、夜分も九つを承らずに臥せり候と申事は無之候。如此餘計之勞苦を仕候事逸樂を願候が人の常情に候へば、小生とても其勞苦を悦び候事にては無之候へ共、此時に當り是にてはすまぬ事と心付候事も、天の靈寵に頼ての事に候へば、是を小にしては御國の爲め、是を大にしては皇國の干城にも相成候爲めに、斯仕候て天寵にも答へ候様仕候にて御座候。此節洋學に癡

食仕候事、敢而私の物好にては無之候。云々」

顧みて今日の我國を見るに、青年學徒にして果して此信仰信念を體得せる者が幾人あるでありませうか、しかも是無くして彼等は何處に偉人たるの道を辿らんとするのでありませうか。前に挙げた先生の獄中記即ち省嘗録の中にも

「人の知るに及ばざる所、而も我獨り之を知り、人の能くするに及ばざる所、而も我獨り之を能くす、是亦天の寵を荷ふものなり。天の寵を荷ふ、此の如くして唯に一身の爲に計りて天下の爲に計らざる時は則ち天に負く、豈亦大ならずや。」

「古より忠を懷きて罪せらるゝもの何ぞ限らん。吾怨むことなし。但し爲すに及ぶべき時に爲さず、將に病弊をして復救ふ可からざるに至らしめんとす。是れ則ち悲むべきのみ。」
「予年二十以後、乃ち匹夫の一國に繋がるあるを知り、三十以後乃ち天下に繋がるあるを知り、四十以後乃ち五世界に繋がるあるを知る。」

等の感懷が見出されるのであります。又前に述べた通り先生五十一歳の時、病氣の癒つたのに對し、「天寵を得て居るから天が洋書を讀まして下さつた爲め醫術の理法を習ひ得たので

ある」と感激して居ります。或は又「天公本知我」と云ひ「天下後世必ず當に公論あるべし、予又何ぞ悔いん、何ぞ恨みん」と叫んで居ります。此等の事柄は如何に先生の思慮の遠大にして其の志操の高潔であつたかを明示するものであります。さうして斯かる憂國の至誠に溢れ、信仰の熱情に燃ゆる先生の面目を仰ぎ見る時、我々後進たる者は自ら省みて洵に慚愧に堪へない次第であると思ひます。

先生は武道は勿論各種の學術技藝に精進すると共に天の靈寵を信ずることが出来た爲め、其の間絶大の努力を積み遠大の卓見を抱き、非凡なる實行家たることを得たのであります。斯くして修養鍛錬せる高潔なる情操、鞏固たる意志は、單に意見を保持するに止まらずして憂國の至情禁じ難く、必ず之を上書したり實行したりしたのであります。門弟吉田松陰の所謂「止むに止まれぬ大和魂」も即ち是れに外ならない。此師にして此の弟子ありと謂ふべきではありませんまいか。然るに近時の教育方法は、唯徒に知識を授くることのみに馳つて最も大切な信仰心を與へることを忽にしたのであります。即ち儒教でも佛教でも基督教でも、將又神道でも宜しいが、兎に角人間以上の絶對なる力即ち普通稱する所の神を信ずることを

眞劍に教へる精神教育を缺いたのみならず、眞の體育も忽にした爲めに情意の鍛錬が出来て居りません。昔の武士道は先づ神に祈つて後に武術をやつたものであります。即ちこの神に對して何等疚しくない所の心身の鍛錬こそ私の申す眞の體育なのであります。今日の體育は兎角競技第一で何んでも勝たうと云ふことばかりを目的にし少し位疚しいことをしても構はぬやうな傾きさへ見えるではありませんか。私は學校などに行はるる運動競技を見るにつけても實に残念に堪へないのであります。例へば應援團は敵が失敗した時に喜んで旗を振り太鼓を叩くのがありませんか。斯の如く他人の失敗を喜ぶ態度は人間の情操をして益々下劣ならしむるものであります。又女學校などでは、よく講義中に先生が失策でもすると生徒はクス／＼笑ふ癖があります。先生の失敗を笑ふのは無禮千萬であつて情操を次第に下劣ならしむるものであります。或は又先生に渾名を付けて面白がつたり其の他色々の不心得を顧みないことに依つて情操は益々下劣となるばかりであつて、遂には親を思ふの情さへも薄らぎ、果ては恐れ多くも皇室に對し奉つて相濟まぬことを敢てするに至るかも知れないのであります。

それ故之を匡すにはどうしても知識を授けると同時に信仰教育と眞の體育とを併せ行ひ以て情意の鍛錬を興へねばならぬ。即ち象山先生の實例でも分る通り、和漢學や科學を學ぶと共に堅き信仰を有ち且つ武道に精進することに依つて、始めて斯様に智情意の三者が圓滿に發達し偉大なる人格者たることが出來たのであります。

惟ふに斯かる教育こそ我が建國の大精神に基き惟神の大道に則り且つ之を完成せしむべき信仰生活を獎勵し象山先生の如く身を以て皇國の爲めに許し天地に恥ぢざる所の大國民を養成するの途に外ならないのであります。

然るに今日の有様は不得要領や御都合主義、八方美人主義の如きを以て世渡りの上法であると考へられ、甚しきに至つては實業家や政治家は虚言を吐くことが上手でなければ商賣も政治もうまくはゆかないなど、心得るものさへある状態なのは實に浩歎せざるを得ないのであります。

故澤柳博士は象山先生を評して「今日でさへ得られない所の偉大なる眞の立憲的政治家である」と歎じ、且又「今日の政治家は一步なり二歩なり時勢に先んじて居るものは殆どなく

時世の進歩に漸く引づられて行く有様であるが象山先生の如きは眞の先覺者たる大經綸家である」と賞して居ります。實に先生の持論たる東洋道德と西洋技藝との合致論や、開國論は申す迄もなく、我國現時の方針を豫言した炯眼と云ひ、門弟吉田松陰が全然先生の卓説に従つて行動した點と云ひ、近くは故加藤弘之博士が「世界の大事を達觀せる識見家」として西郷翁と並び稱し、藤田東湖、横井小楠などは到底及ぶ所でない」と評した點等より見ても、實に近代に於ける一大偉人であると稱せざるを得ないのであります。

若し果して然らば我國現時の政治界と云はず、學界と云はず、産業界、教育界と云はず第二第三の象山を見出さんが爲めには、家庭教育を始めとして教育界に一大改革を加へ建國の大精神に基き惟神の大道に則り且つ之を完成せしむべき信仰信念を興ふるを以て第一義となし、身を以て皇國の爲めに許す所の大國民を養成するを以て急務中の急務と信するのであつて、同時に現下の青年學徒に向つて一大覺醒を促さざるを得ないのであります。

長々と愚見を申述べ且つ時々脱線の感さへありましたことは、洵に相濟まぬわけと存じますが唯國家のことを思ふの切なる餘り僭越と微力とを顧みず敢て皆さんの前に微衷を懇へさ

るを得なかつた次第でありますから、何卒失禮の段は偏に御寛容あらんことを願ひ、併せて御静聽を得たことを深く感謝致します。(終)

電氣三賢遺品展覽會出陳目錄

(佐久間象山先生の部——主として理化學に關するもの)

- 一、象山先生肖像 一面 東京 故渡 邊 驥 氏藏
- 宮本孟、蘭村雪嶺二氏の描きたる油繪畫像
- 一、象山先生肖像 一面 松代 羽田桂之進 氏藏
- 酒井雪谷筆(日本畫)
- 一、象山先生實驗スコツク・マシーネ(衝動機) 一具 東京 伯爵 眞 田 幸 治 氏藏
- 一、象山先生實驗コンスト・マグネート(地震計) 一具 松代 羽田桂之進 氏藏
- 一、傳象山先生製ギヤマン盃 一箇 松代 羽田桂之進 氏藏

一、象山先生書簡 一卷

東京 赤池 濃氏藏

安政元年四月二十七日獄中より山寺懼堂(源太夫)三村樂眞齋宛

安政年間の國事海防につきて論じ特に吉田松陰の渡航に關する意見を記し
松陰の人物を稱揚して「小弟門下にも多く無之忠直義烈の士に御座候」とい
ひ「之子有靈骨」の詩を記したるもの。

一、象山先生書簡 一卷

京都 青柳 榮司氏藏

村上誠之丞宛天下の形勢を論じ且つ櫻賦天覽に關するもの

一、象山先生書簡 恩田頼母宛千貳百兩借用の件

松代 羽田 桂之進氏藏

右金子は和蘭辭書出版に要せし者なり。恩田氏は松代藩家老なり。

一、象山先生書簡

東京 宮本 仲氏藏

元治元年四月京都に徵され山階宮に拜謁した際のものなり。

一、象山先生書簡

東京 宮本 仲氏藏

夫人虎烈刺病に罹られしを衝動機を用ひて治療されし治驗記。

一、象山先生書簡 衝動機(スコツク・マシーネ)實驗の書簡、齋藤友術宛

東京 宮本 仲氏藏

一、象山先生書簡 ギヤマン製法に關するもの 塚田五左衛門宛

東京 宮本 仲氏藏

一、象山先生書簡 自費孔子像の題贊を書きしもの

東京 宮本 仲氏藏

一、象山先生書簡 一幅五通

東京 中山久四郎氏藏

佐藤安喜宛、砲臺臺場難形に關するもの。

御普請方宛、大砲に關するもの。外三通。

一、象山先生自筆 白井某醫案 一卷

長野 近山與五郎氏藏

一、象山先生七絶 題地球儀詩 一幅

東京 南 大曹氏藏

東洋道徳西洋藝、匡廓相依完圖模、

大地周圍一萬里、還須缺得半隅無、

一、象山先生書 一幅

京都 川面 松衛氏藏

苟得其心、五洲之人、皆可得而使也、厚而利之、

導而余之、敵間之來問我者、亦爲我用矣、何況民、

一、象山先生演大砲之詩 一幅

東京 赤池 濃氏藏

嘉永四年大砲演習の詩

春野乘晴演大砲、四林桃杏正芳菲、
一聲霹靂震天地、萬樹新花掠亂飛、

一、象山先生書 一卷

京都 青柳 榮司氏藏

丁未冬上田客舍論東西學術詩

一、象山先生愛讀の蘭書 併せて十冊

長野 近山 與五郎氏藏

一、象山先生著迅發擊銃圖說 一冊

松代 長谷川 五作氏藏

一、傳象山先生使用蘭英華辭書 一部八冊

松代 羽田 桂之進氏藏

一、象山先生自撮令夫人(順子)寫真(複寫)一面

東京 增澤 淑氏藏

一、象山先生自撮令息恪二郎君寫真(複寫)一面

東京 增澤 淑氏藏

一、象山全集 上下二卷 大正二年刊 信濃教育會編纂

東京 增澤 淑氏藏

附 錄 (二)

一、感應公と象山先生 一冊 大正二年刊 埴科郡教育會編纂

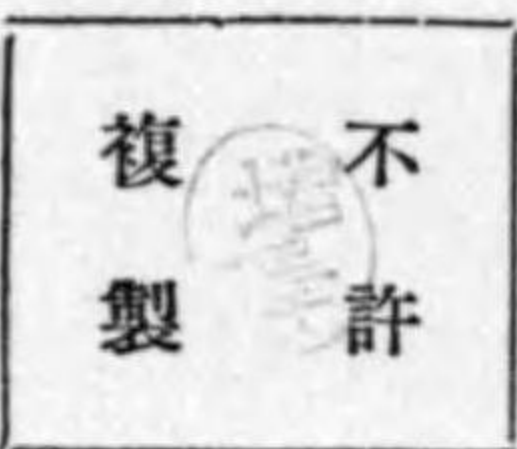
一、佐久間象山 一冊 大正五年刊 象山先生遺跡表彰會編

東京 增澤 淑氏藏

佐久間象山(終)

大正五年五月十五日 初版發行
昭和五年十二月廿五日 增訂再版

〔定價金一圓五十錢〕



著作者

象山先生遺蹟表彰會

發行者

東京市外代々木四八九
增 澤 淑

印刷者

東京市芝區神明町三〇
山 本 五 平

東京市外代々木四八九

發行所

地理歷史研究會

振替東京四〇七六三番

發賣所

東京堂 東海堂 北隆館 大東館

終

